

---

# 魔王と神と天空の城

メア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王と神と天空の城

### 【NZコード】

N7171W

### 【作者名】

メア

### 【あらすじ】

神に殺されたかどうかはわからないが、神様から嫁付きチートを頂いて転生しました。転生先はゼロの使い魔。始めに嫁を調教・・・

- ・・・もとい、教育せねばなりませんが、がんばります。

これはカンピオーネの一部キャラが嫁です。無理矢理従えるとか原作崩壊（そもそも、作者が一次創作やWikιしか知らない）やキ

ヤラ壊れが許せる人だけ見てください。

## プロローグ（前書き）

書きたくなったから書いてみた。

## プロローグ

「こ」は何処だろ？ 真っ白な空間だけ。確かに、小説を読んでたら急に力が抜けたんだよな？

「パンパカパン」

「うん、夢だな」

「嫌、夢じゃないか！」

田の前にべす玉をもつた白い爺。そして、手には小説。

「あんた誰？」

「神じゃ」

「自称神は転生しようと？」

「自称じゃないわ！ まあ、その通りじゃ」

まさか、本当に転生とはな。さて、どうしてくれよ？ 別に戻る気もないし構わないがな。

「で、何処の世界よ？」

「ゼロ」

「コードギアス？」

「いや、ゼロ魔の世界じゃ」

「やだ。確か死亡フラグ満載じゃん。しかも、原作知らないし」

「コードギアスもそうだけどな。あつちは、ギアス次第だしガンダムとかナイトフレームとか乗りたいからな。」

「そう言つた。特典も用意してあげるからさ~」

「何個?」

「三個」

「少ない」

「えつ、多いじゃねー!」

「良く考える。どうせ不死とかは出来ないんだが?」

「うむ」

「だから、もっとくれ」

「だつて三つって低いだろ?」

「もうじやな・・・・・・まけて四個じやな」

「不死や不老意外ならなんでもいい?」

「うむ、良いぞ」

よし、言質とった!

「カンピオーネって知ってるか?」

「まさかっ! ?」

「気付いたか。そう、一番の狙いはなんでもいいといつ、言質が欲しかったんだ。

「最強の鋼と言われるアーサー王の権能を全て使える神殺しだら、これはアーサー王を殺して手に入れるんだから一つだろ?」

「くつ、無理じゃ。発現するかは本人しだいじゃからな」

「なら、一つで全て発動するよつて呪力など徹底的に強化しろ」

「良かう」

「後二つかな? 後、一つは神だな。アテナでもいつとく?」

「三つめはフレイヤの権能だな」

「これもか? もう、勘弁して欲しいのじやが……」

「四つめは……アテナを下さこ」

「せつ？」

「アテナを下せ。アテナを下せ」

「いや、聞いたが……」

「あつ、わらりんまつわわぬ神状態のアテナな」

アテナは大好きだ？カンピオーネで一番気に入っている。

「いやいや、一番最後のが一番無茶じやからー他はワイロを色々送  
ればどうにかなるんじやが……」

「うむ、良いぞ」

「…………」

「つむ、良いぞ」

「わかった。ただし、びつなつとも知らんぞー」

七色の横帯で真似てコピーしてたら落ちたな。くっくく。

「では、ひとつと行け。アテナは後で届ける」

「了解」

「そして、ハルケギニアに降り立つ新たな神殺しよ……一度と  
くんなりー」

「あせははー。」

そして、俺は落とされた。ちなみに、俺の職業はマジシャン兼詐欺師兼怪盗だ。

まじで転生しましたよ。今は赤ん坊だな。

「陛下、殿様、双子の司馬ひこお下わんですかねー。」

「ところがなぜかこのひこうちだね」

「はー」

双子か・・・・待て、まさか・・・・なんか奥底から身体の力が沸いて来るか?

隣を見ると、怒り狂い馬鹿げた力を向けて来る赤ん坊が隣に寝ている。しかも、力を放つてるのは二つしかまだ。

「おおやあ、おおやあ（貴女が妾をこんなにした元凶か。護堂に殺されて氣付けば）のよつな・・・・神の力は有るよつだが・・・なりば・・・・」

「おおやあおおやあ（取りあえず、五歳くらいここまで休戦しないか？その後、決着をつけようぜ？）」

「うー（良かね）」

さすがに、動けないしな。お互にこの状態で暴れられないのは理解しているしな。

「さて、男はアルカイド。女はアテナだ」

「素敵な名前ですね」

「ほくほウニールズ。これからようしくね。アルカイド、アテナ」

「（断る）」「

「ひつて、ハルケギニアに転生をはたした。

三歳の時、俺とアテナは言葉と読み書きを覚えた。神殺しと神は  
だてじやない。

後、俺達は平民の妾の子供だったりしくアルビオンの王宮から追い  
出され、王家直轄地の一つの浮き島（結構広い）を貰えられた。む  
ろん、俺とアテナは興味無しなんだが母親は日に日に衰れていった。  
そんなのを無視して俺達は外で本ばかり読んでいた。

「アテナ、ここでは杖の契約しないといけないらしいよ?」

「必要なですか?」「

「興味あるんだけどな」

「私には効きませんよ・・・・」

アテナは怒つたり戦いの時以外は妾から私になつてゐる。

「つて言つたが、領地どうあるよ?」

「三歳の私達に何をしろと？」

「確かに。でも、食事がまずいのは頂けない」

「確かに・・・・・」

この浮き島はぶつちやけ荒れ地で土地だけ広いんだ。まあ、ラピュタ

「仕方ありませんね」

「やるか」

一人で手を合わせて呪文を言う。

「バルス」

「これ、崩壊の呪文じゃね？」

「そうですね。貴方からやれと書つ意味が聽こえておもつたからや  
りましたが・・・・・」

「取りあえず、止めて力を与えようか」

「はい、無駄ですかね」

今度はちゃんと豊饒の女神たる権能を使い土地に力を与える。

「竜脈を創りました」

「うちは金山とか縁だな」

תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה תְּהִלָּה

「やつ廻<sup>アラシ</sup>た（あしたね）」

外は大変な事はないらしい。急に緑が生えて来て、目力な世界樹が出来ていた。

「天空の城をイメージしたのがいけなかつたのだな」と

「まあ、気にしない」

俺達のいる領地は美味しい果実が手に入るようになった。といつて  
も後二年で崩壊するかもだけどな。

そしてやつてきました五歳です。ちなみに、母親は一年前に無くなりました。王家の方からは何もありません。ウェールズ兄さんが個人的に送つてきた限りだ。

ちなみに、領地は代官がやつて来て好き勝手してる。俺達が子供だ  
と思ってね。特に許せ無いのがアテナに色目を使いだした変態つ  
ところだな。アテナは俺のモノなのにな。

アテナの容姿は肩の辺りまでのびた銀の髪は、月の光を溶かし込んで  
だかのように淡く輝き、瞳は闇夜そのもののじとく黒いし、天使の  
ような可憐な顔だちをしている。俺は銀の髪に金の瞳だ。

「さて、準備は良いか神殺しよ？」

「ああ」

そうです。アテナとの対決です。これは外せないよな。場所はロマ  
リア皇国上空だ。

「妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを越え行く者。

妾は謡おう、三位一体を為す女神の歌を。天と地と闇をつなぐ、輪  
廻の智慧を。

妾は謡おう、貶られた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女  
王の嘆きを。」

「ちょっと、この詠唱は本気じゃねえか！」

「妾は謡おう、引き裂かれた女神の詩を。至高の父に凌辱された慈  
母の屈辱を。

我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処  
女。されど、かつては命育む地の大母なり！ かつては闇を束ねし  
冥府の主なり！ かつては天の叡智を知る女王なり！ ここに誓う、  
アテナは再び古きアテナとならん！」

この詠唱が進むにつれて、アテナの姿が変わって行く。背が伸びて、すつきりと手足も伸びきり、可憐な幼女の背格好から可憐な少女へ。面差しは変わらず天使のような可憐な顔立ち。外見は14歳くらいかな。着衣は古風な白い長衣となっていた。

「可愛いぞアーテナ」

「なに?..」

しばらく、自信の格好を見ている。

「何故だ!何故小さいままなのだ!」

本来なら17歳くらいになるはずなんだが、たりなかつたな。

「まあ、いいじゃん」

「仕方ないな」

「勝った方が好きにできるでいいな?」

「つむ、では殺し合おつか」

いつして、五歳にしてまつるわぬアテナとの戦いを始めた。

始めにアテナが闇の領域を展開した。昼間なのに半径10キロくらいが一切の光が無い世界へと変貌した。

「来たれ我が眷属よ」

アテナの後ろに大量の光る金の眼が現れた。

「我はヴァルハラの支配者なり、顯現せよ戦乙女！」

「なんだと…………」

フクロウに対して呼びだしたのは、光り輝き純白の翼を持つ美しい女性達の軍団。

「行け！」

戦乙女の相手になるわけもなく、闇の領域であるのに、戦乙女から放たれた多数の光弾や光りの槍はフクロウを慘殺していく。

「くっ、竜よ来たれ！」

今度は竜か。出て来たのは東洋の龍が一五匹だ。膨大な呪力を使ってやがるな。

「我が名はアルカイド、勝利を導く軍神なり！ 戰乙女よ奮起し我に勝利をもたらせ！」

最強の鋼の軍神たる色々混じつたアーサーの権能とフレイヤの戦女神としての権能を同時に使用する。

「ぐつ！」

頭が痛いが、我慢する。三つの権能を同時に使用するのは無茶か。

しかし、龍達は光速で接近した戦乙女達の槍により串刺しにされ死に絶える。

「やはり、神殺し…………並の手段では勝てぬな

アテナは黒き鎌を取り出し一閃。それだけで、数人の戦乙女ヴァルキリアが消滅した。

「妾は冬を招き、死を振り撒く者。冷たい冥府の支配者。刈り取り、奪い取る駱尊の女王。その妾が命ずる。死せる王となり、骸をさらせ！」

アテナが展開した間に触れたモノはことごとく死んで行く。神殺したる自身は大丈夫だが、下のロマリアや領地もかなりやばいぞ？

「くそつ、じうなりややつてやる！」

アーサー王の権能で一番強いのはエクスカリバーだろう。しかし、剣は無い。しかし、最強の鋼たる理由は何も剣だけでは無い。

「私は神殺しにして終末に現れる最強の鋼より権能を篡奪した者なり、故に我が身は最強の鋼なり！」

「反則では無いか！」

光り輝くオーラを纏い、自身を一時的に最強の鋼と同じ戦闘能力を得る。

アテナの放った黒き鎌の一撃を素手で叩き割る。

「八九」

アテナが黒耀石のような者を作り出そうとしている。

「させるか！ 我は竜を殺す鋼に力を与えた者なり、故に我はその力を行使する！」

「ランスロットだ・・・・・・つ！」

アテナにラッシュを決めていく。容赦はない。あの黒耀石の奴は  
問答無用で殺されるやばい奴だから！

「がはつ」

アテナの身体がくの字になつてもやめない。全力でガントリングのように乱打を決める。妹にする事じやねえな。

しばらくして、アテナが元に戻つたので止めて、創りだした黒耀石を奪い取り首筋に宛てる。

「俺の勝ちだアテナ」

「くつ、致し方ない。殺せ」

「イ・ヤ・ダ」

「・・・・・何をする」

アテナを抱き抱え、死の荒野となつた領地の一帯とロマコアから館に戻る。

館は死体だらけだな。後で処理するか。三日後には俺とアテナ付きのメイド達が帰つて来る。当然、逃がしてましたとも。

さて、ベットに寝かせたアテナの横に座り話をする。

「アテナ、勝つた方が好きにするつていつたよな？」

「だから、殺して権能を奪つたあらう？」

カンピオーネの世界ならそうだな。でも、こゝは世界が違つからな？

「まさか、護堂のよつて見逃すと？」

「まさか、俺が欲しいのはお前自身だ」

「なつ／＼／＼

「と、言つわけ契約により、アテナを俺の者にするー。」

「やめろつ、妾を凌辱する氣かー？」

アテナは可愛いし、誰にもわたさん。それに身体に教え込んでやる。

「つむー。」

「正気か？」

「当たり前。それに神では普通だろ？」

「…………貴様しだいだ…………」

「いただきます！」

「ぐつー！？」

それから、アテナをたっぷり調教…………もとい、教育した。

アテナをちょ…………教育したんだがさすが女神だ。2年も  
かかったぞ。

「お兄ちゃん、ロマリアの被害が数千人だって

「あははは、派手にやつたな

今では俺をお兄ちゃんと慕ってくれている。まあ、実際は途中から  
快樂欲しさにわざと反抗したりもしてたし、本人も一緒にいるのは  
結構楽しかったのでよかつたらしい。ただ、神と神殺しとしてや、  
最初に無理矢理連れて来られたりしたのがかなり御立腹だったみたい  
い。

「どうか、どうせしばらく死んだままだつたのだからかまわない

「ランスロットと対決にあたり護堂と組んで戦つたけど、死んじやつたもんね」

「そのおかげもあり、お兄ちゃんを受け入れたのですけどね」

「アテナお嬢様。代官様がお呼びです」

ふむ、しぶとく生き残り私腹を肥やしていくがアテナにちょっとかいをかけて来たか。そろそろ潮時かな。

「どうする?」

「領地経営のノウハウは?」

「叡智の神に何を言つていい?」

「『』もつとも。なら、心筋梗塞でお亡くなりになるだな」

「わかった」

そして、派遣された代官はお亡くなりになつた。次の派遣は断つた。自分達で勝手にするからとね。さて、天空の城に改造するぞ!と、その前に杖の契約だな。だって何もしてないもん。権能あるし、必要無いだろ。ああ、異端審問もあるか・・・・・面倒だな。虚無と偽ればいいや。権能は充分、虚無と偽れます。一応、始祖の血統だしな。



一話（後書き）

ウーハー・ルーズさんの苗字ってあれだけ？ド・アルビオンとかつかないのかな？

一話（前書き）

領民を手に入れます

「ここにちは、アテナとイチャイチャしているアルカイドだ。早速ですが、問題発生だぞ。問題とは……そして、誰もいなくなつただ。

「みんな死んでしまった」

「あ～出力間違えたか」

「うん、ろくな連中はいなかつたけど」

メイドもいなし、一人だけかな。まあ、好き勝手にできるか。

「どうする？」

「まずやる事は、死体の処理と領地の把握だな。死体は戦乙女ヴァルキリヤでやるから、領地の把握はフクロウで頼む。ついでに各地に派遣してくれてもいい」

「優秀な人材を探すのか。わかつた」

「こんな事に使うのはどうかと思うが、使える物は何でも使うぞ。

アテナが数万羽にもなるフクロウを召喚し、密偵として世界中に放

つた。こつちは戦乙女ヴァルキュリアを100人ほど召喚し、死体の処理及び警備をさせる。

「お兄ちゃん、ウホールズから手紙が届いているよ

「何々・・・・現状を報告しろだと？ 疫病でみんな死んだけど、アテナと一人で病原菌（代官達）は駆逐出来たので心配ありません。これから一人で領地経営します。勝手に難民とか受け入れても問題無いよね？ とこんな感じでいいや」

「ん、フクロウに届けさせよう」

「お願い」

「では、本格的に祝福をあげましょう」

「ああ」

枯れ氣味な世界樹に一人の膨大呪力（魔力）を与えて活性化させる。龍脈と合わせて世界樹と龍脈が作り出す力を領地内に循環させる事で土地の力を永続的に増やす。これにより、再度荒野に戻りかけた大地は息を吹き返す。

「ふう、休憩にしましょう

「お茶を・・・・メイドもいないんだった・・・・・・」

「私が煎れますね」

「お願い」

アテナが……女神が煎れるお茶つてかなり贅沢だよな。よし、仕事するかな。

取りあえず、領地内の至る所に純度100%の金山を作り出す。まあ、フレイヤの金を作り出す機能だけだ。後は、代官が売っていた金の販売ルートを探すとするか。

しばらくして、手に怪我をしたアテナが戻ってきた……。何故に怪我をする? といふか、不器用なのか?

「お兄ちゃん、出来た」

「ありがとう。怪我は平氣か?」

「うん／＼／＼

デレるよつになつたアテナの照れ顔は天使のよつに素晴らしい。思わず、膝の上に乗せてしまつ。

「お兄ちゃん?」

「ああ、美味しいよ

紅茶なんだが……今まで飲んだ事がない程美味しい。葉っぱから自作したようだな。普通の紅茶がただの水のよつに感じてしまう。

「よかつた……」

そろから、しばらくまつたり過ごした後、仕事を行つ。

**戦乙女達**には金の採掘をさせて、アテナは果実や植物を品種改良している。俺は身体に**戦乙女**を宿して空を飛び、領地を区画事に更地にしたりなどして整理する。その後は設計図を書いていく。不眠で行うので作業が捗る。

さて、ここでカンピオーネについて説明しておこう。

カンピオーネとは、神を殺してその力（「権能」と称される）を篡奪した者の総称である。「エピメテウスの落とし子」「魔王」などとも呼ばれる。高い身体能力と怪我からの回復力、そして経口摂取などの特殊な方法でもない限り己にかかる魔術や呪術を一切受け付けない体質を持ち、並の人間や魔術師では抗うこともできないとされる。また高い言語習得能力・フクロウ並みに夜目が利く・人間離れした直感力・真剣勝負になると体の状態が勝手に最良に近づいていくなどの体質も併せ持つ。

カンピオーネの義務は「まつろわぬ神が現れた場合、人類代表として戦うこと」のみ。その義務さえ果たせば何をしても許されるという暗黙の了解があり、カンピオーネは大抵自己中心的な考えを持っている。

カンピオーネが神を倒した場合にも権能を篡奪する事が可能だが、「神殺しの母パンドラを満足させ、己の養子に迎え入れたいと思わせる勝利」を得なければならず、正々堂々の一騎打ちでなくとも相応の戦いぶりを見せる必要がある（例として変態騎士はパンドラから「弱った神様を狙つて倒しても権能は増やさない」と釘を刺されおり、実際ペルセウスを倒しても変態騎士の権能は増えなかつた）

これがカンピオーネだ。ちなみに、カンピオーネはイタリア語でチャンピオン。次はまつろわぬ神アテナ達について。

人の紡いだ神話に背いて自惚に流離い、その先々で人々に災いをもたらす神々。基本的にカンピオーネ以外には抵抗することもできないうが、奇跡的にただの人間がこの神々を殺せた場合、その者はカンピオーネとなる。

なお「殺す」とは言つものの、そのベースが神話である以上一度殺した神が復活する可能性はゼロではないらしい。

まつろわぬ神の出現には『原則』が存在し、神の降臨の際には、降臨時の地上の神話をベースに肉体と精神を形成される。そのため、同じ神でも降臨した時代の伝承の内容が変わることによって神の性質が代わり、既に失われた神話の神が長い時間まつろわぬ神として過ぎ去ることによって現代に現れることがある。

さて、不眠で行ける理由は真剣勝負になると身体が勝手に最善の状態になるというのを利用している。それは、神と神殺しは出会うとほぼ自動的にベストの状態になるからだ。もちろん、意識的に切ることは出来るがオススメ出来ない。

領地経営に乗り出して一ヶ月。金の販売により10万エキューを手に入れた。1エキューは日本円にして1000円だから1億円に相当する。

そして、いい加減二人ではしんどいので人を入れる事にした。

「アテナ、どんな連中がいいかな？」

「土メイジでしょう。それも最低でライン、普通でトライアングルですね」

メイジは基本的に四系統魔法を使う。四系統魔法とは、メイジが用いる魔法で、火、水、風、土の4系統がある。各メイジはいずれか一つの系統を得意とし、その系統の使い手と呼ばれる。魔法の熟達により複数の系統を使いこなすことも出来る。同時に系統が増えるにつれドット（1系統のみ）、ライン（2系統、又は1系統の2乗）、トライアングル（3系統、又は1~2系統の3乗）、スクウェア（4系統全て、または1~3系統の4乗）の使い手と呼ばれる。複数の系統を組み合わせて初めて使える魔法も存在するらしい。俺達は契約すらしていないのでドットですら無い。

「ん~年齢は問わないから適当に引き抜くとするかな」

「そうですね。後はメイドや領民も増やさなくてはいけませんね」

「ぶつちやけ、税は三割でいいしな」

確かにハルケギニアの平民の税は6~7割だったはずだからな。

「では、声をかけてみますね」

こうして人材を探す事にした。アテナのフクロウに負けないためにフレイヤの眷属である猫達を召喚してハルケギニアに解き放った。

### 三人称Side

街道を急スピードで走る馬車が一台。その後ろからは翼が生えた蜥蜴のような・・・・・俗に言つ野生のワイルドの群れに追われていた。

「くそっ、いつたいなんなんだよ！」

「いいから早く逃げろー・せつかくの商品が台無しだぞー！」

しかし、いくら頑張ろうと地を行く馬車と空を翔るワイルドでは始めから勝負がついている。

「切り離して凹にするぞ」

「くそつ、仕方ねえ！」

馬車についていた荷台を取り外し、速度を上げる馬車。荷台は地面に転がり多数の悲鳴が聞こえた。

そこについた鉄格子・・・・牢屋だ。中には多数の若い女性や男性、子供が手足を拘束されていた。その人達の顔には恐怖や絶望が写し出されている。

「GYAAAAAAA！」

多数のワイバーンが牢屋に噛み付き、鉄格子を破壊しようとしている。

「…………」

その中で三人だけ静かな者達がいた。その三人は少女と女性、男性だった。どうやら親子のようだ。女性の一人は青い髪に緑の瞳。男性は金髪に赤い瞳。そんな親子の近くに一匹のフクロウと猫が現れた。普通はワイバーンを恐れて近づく事は無い。ワイバーン達もまるでいない様に扱っている。

「何かな？」

「さあ？」

「不思議だな。このような生物はハルケギニアにいたか？」

猫とフクロウは不思議な声を全包囲に発した。

「助けて欲しいば我等と契約せよ（ニヤ）」

「えつ？」

「喋った！？」

「契約内容は？」

殆どの人が驚く中、親子の男性は契約内容を確認する程、冷静だった。親子は使い魔だと思ったのだろ？。実際に言葉を話せるように

なるルーンも存在している。

「我等が主達の領民となり、主達に従え。特典は、最初は衣食住を保障し、戦争時以外は税金一律三割。土メイジがいるなら優遇する。とのことじゃ」

「いいでしょ？」

「母さん？」

「お前達はどうある？」

親子は早々に決めて他の人達を促した。

「衣食住の保障か・・・・・・」

「しかし、税率が三割か・・・・・しかし、裏があるので?」

「しかし、奴隸にされた私達に自由はない。それに、このままだとワイヤーバーンに食べられるだけよ?」

「・・・・・（）」「へ」

女性の説得により彼等は決意したようだ。それを感じたフクロウは主を呼び出した。

フクロウが光り輝くと、そこに一人の少女が顕現した。

「喚ばれて飛び出でじゃじゃん?」

小首を傾げつつ変な事を口走る少女がいた。

「 「 「 「 . . . . . 」 」 」

「お兄ちゃん、受けてないよ？」

「 「 「 「 . . . . . 」 」 」

「あう／＼／＼

「うやらアルカイドの入れ知恵のようだ。いくら丸くなつたとはい  
えアテナがやるはずの無い事だから当然だ。

「可愛いからいいじゃないか。それより、ワイバーンなら確保して  
くれ」

「わかりました。貴様等、妾に従え」

少女の雰囲気がガラリと変わり、神々しい気配を放つ。そして、威  
厳ある声を発すると、牢屋を破壊しようとしていたワイバーン達は  
頭を足れ忠誠を誓つた。アテナは竜の神とも言える存在故に全ての  
竜は彼女に従う。従わないのは余程忠誠心がある存在だけだろう。

「スゲー」

「群れも全て連れて来なさい」

「G R U」

命令に従い仲間を呼ぶワイバーン。アテナは次の仕事を行つ。

「さて、貴様等はこれを運べ」

残りのワイバーンに牢屋を持たせ領地へと運んだ。

三人称SideOut

アテナが連れてきた人達には館で生活してもいい。というのも、家は全て壊して区画整理をしやすくしたからな。

とりあえず、料理が出来る人に食材は好きに使って炊き出しを作つて貰つた。出て来た料理はシチューのような物だった。

「久しぶりにまともな『飯だ！』

「今まで何を食べてたんですか・・・・・・」

青い髪の同じくくらいの少女が食事を持って来てくれた。

「「果実」」

「「・・・・・」」

あれだ、神たるアテナは食べなくてもいいし、身体は常にベストコンディションに整えられるカンピオーネも本当は食べなくても生きようと思えば生きられる。でも、やっぱり食事は食べる。心を育むらしいしね。アテナは俺に付き合ってくれる。

さて、食事が終わつたのでお仕事だ。お代わりとかしてまだ食べている人もいるけど気にしない。

「食べながらでもいいから聴けよ」

皆（30人くらい）がこちらを見る。ちなみに、他にも連れてきたよ。犯罪者じゃなくて、税金が払えなくて夜逃げしようとしてた奴や娘を取られた人達（救い出した）とか色々な人達だ。

「まず、魔法が使える人はいるか？」

「んつ」

「はい」

さっきの親子と・・・・全部で六人か。五分の一と考えたら大いな。

「ランクと系統は？」

「私は火のライン」

「俺は風のトライアングル」

「僕は水のトライアングル」

くつ、欲しいのは土なんだけどな。風は伐採に使えるし、水は秘薬を作れるな。火は工場に使えるけどな。

「火のスクウェアだ」

おお、トップだぞ！さすが強そうな親子！

「私は水のスクウェア、土のトライアングル」

キター！しかも、水はスクウェアだと！娘も期待だ！

「えっと、土火水共にラインです」

将来の期待大だな。可愛いし、側に置こう。可愛いは正義だろ？

「わかった。じゃあ土が使える一人は悪いけど皆の家を作つて」「

「わかつたわ」

「はい！」

「風の人は木の伐採を頼む」

「はい！」

「火の人達はやること無いや。レビテーションで荷物運び。水の人  
は何かあれば治療してあげて。杖はここから適当に選んで」

多数の杖を渡してやる。もちろん前にいた連中の物じゃない。作つ  
た奴だ。材料は世界樹の枝に女神の祝福付き。成長しやすいように  
増幅機能もいろいろついてる。

「あつ、平民とか貴族とか関係なくお互い助け合つよつた。後、亞  
人もいるけど差別とかは許さないからな。ちなみに、君達は言靈で  
縛つてあるから外部に漏らすことも出来ない」

神や神殺しが発する言霊には、強制力がかなり強い。

みんな納得したようで宜しい。法律なども教えたし、アテナが平民を技術者事に分けたから問題無い。

それから、各自別れた。

水のスクウェア・土のトライアングルメイジはブレンヒルト・クレスメントと言うらしい。夫がジークフリート・クレスメント。娘がフィル・クレスメントだつて。

今は娘と一緒に住宅予定地に一戸建ての4～8LDKの家を次々と作つて貰つてゐる。

「きついわね」

「大変です」

「精神力がやばいならこれ食べてね」

黄色い果実。世界樹の実とゆわれる精神力を全快にしてくれる優れものだ。別名禁断の果実だがな。

「美味しいわ」

「ちゃんと回復します……」

「やるわよ」

「はい」

「「イル・アース・デル、練金！」」

それからも、頑張つて働いてもらう。ある程度、住宅が出来たら工場（製鉄所など）を作つて貰つた。ジーケフリート達に金を熔かして貰い職人達が加工していく。必要な材料は金に糸目を付けずに揃えた。

そんなことをしていると早六ヶ月。ウォールズに土メイジを借りて港（飛空挺のドックなど）と街（工業区など）を整備して、館を城に作り替えた。まあ、ラピュタなんだけどね。更に、住民は増えていき1000人を超えた。平民からも優秀な人材は登用し、引き抜きも行つた。トリステインやガリア、ゲルマニアから・・・・アルビオンからも少しな。

「さて、アルカイド様、アテナ様。杖の契約は終わりましたか？」

「「うん」」

今はブレンヒルトさんに魔法を教わる事になりました。ブレンヒルト達には虚無と偽つて權能を教えたら、四系統魔法もやってみると言われたので教わる事になつた。

「では、杖の先に光が灯るよつてイメージしてライト」

ブレンヒルトさんの杖の先に光の塊が出現した。

「では、二人共どうぞ」

「 ライフ 」「

辺り一面が真っ白になつた。

「魔力を込めすぎです」

「少ししか入れて無いんだけど」

「私達の呪力は膨大ですから」

神殺しの魔王とまつろわぬ神だからな。

その後、練習してどうにかコモンスペルをマスターした。フライは魔力込めれば馬鹿みたいな速度ができる。お互いに魔術の神でもあるからな。俺は神殺しだけどな。

「アルカイド様、朝ですよ。起きてください」

「ああ、おはようフィル」

フィルは俺専属にして、寝食共にしてる。無論、夜のご奉仕もさせている。フィルも最初は嫌がったが直ぐに諦めた。この世界では普通みたいだ。まあ、フィルはかなり優遇してるけどね。

「ほり、起きろアテナ」

「おはようお兄ちゃん、フィル」

猫のように眼を擦りながら、眼を覚ますアテナ。その天使のような

可愛いさにキスをして、押し倒してしまつ。

「アルカイド・・・・・・」

菲尔が呆れている。その証拠に様が外れている。

「ほら、菲尔も来い」

「・・・・・はい」

それから、1時間。一人と遊んだ。無論、食事は暖かい。だって菲尔はこれを予想して早めに起こすからね。

朝食後は、訓練所で三人仲良くブレンヒルトさんから魔法を習う。ちなみに、訓練所の横には実験所がある。ここ天空の城は多段構造になっている。上層は城と街がある。街はヴェネチアをイメージして作つた。街の郊外に訓練所と実験所がある。工場などは研究所の下、中層に作られている。

「さて、今日は四系統魔法よ。菲尔は復習をしていなさい」

「はい」

俺達は、ブレンヒルトさんから教わる。

「まずはどの系統が得意か調べましょつ。ウル・カーノ、発火」

ブレンヒルトさんの杖の先に、ライターで出来たような火が現れた。

「おー」

「ウル・カーノ……………出来た」

それから四系統を全て調べたんだが、全部出来た。

「どの系統も得意ね。貴方達は始祖の再来じゃないかしら?」

「その程度と一緒にしないで」

「アテナ、本当の事だけどブリミル教がつるさいからや」

「ハリは排除すればいいじゃないですか」

「敵対したら排除しよう」

アテナの意見には賛成だ。汚物は消毒だよな?

「貴方達、外では気をつけてね?」

「「はー」」

それから、多少訓練して帰った。これからはブレンヒルトは別の仕事だ。

次の日、三人で魔法の訓練をしているとドットからラインに上がった。

「なんですか、その玉籜田な遙れせ・・・・・」

「神の力」

「・・・・・」

— — — — —

どうするとアーテナとアイコンタクトを行い、決定する。

「ファイルに力を上げよう」

え？

「俺からは戦乙女の力を」  
ガルキアリア

「妾からは魔法の力を」

ファイルに戦乙女を宿らせ融合させ、そこにアテナが知識を与え祝福をかける。

「何を、んつ

口づけを交わして完了。

「凄く沢山の力が沸いて来ます・・・・・」

「うん、後は俺達の正体を教えておいで」

「それでいいでしょ」

神と神殺しについてフィルに教えると簡単に納得した。ブレンヒルトは既におかしいと気付いていたらしい。流石だな。

それから、俺達は魔法の訓練がてら天空の城アーケ（名付けた。領地名も変更した）の外壁をヒヒイロノカネやミスリルに作り替える作業を開始した。もちろん、固定化もかけるしカウンターもしかけた。まあ、ミスリル自体に反射があるんだけどな。

一週間で完成した。そして、俺達三人はトライアングルになつた。流石魔王と神だぜ、速さがハンパない。

さて、前々からやりたかった事があるので王城にある研究所に來た。ここは、俺達の個人用だ。

「何をするんですか？」

「ふつ、ふふ。じじゃーん！」

「銃ですか？」

「ああ、これを改造する！」

「ファイルが呆れている。

「弱いですよ？」

「任せろー。」

「わかりました」

それは諦めてるよな？理解じゃなくて諦めてるよなー…やつてやる。

「とりあえず分解だ」

「はい」

分解して構造を把握した。バレルはただの筒だな。螺旋を入れてライフルと同じにする。無論、弾も改造する。

「さて、引きがねはバネを使って・・・・あつ、そこは上から排出するから」

三日ほどで完成した。マスケットじゃないよ？スナイパーライフルだよ。射程は1キロだった。

「凄いですね・・・・」

「まだまだ改良するぞー！」

弾丸と薬莢を作り、遠見のマジックアイテムを作つてスコープを作る。さらに、撃鉄の部分に爆発はまずいから反発を利用して・・・・ああ、レールガンいいのか。バレル自信に放電させ螺旋状に回転して発射するようにすれば良いんだ。バレルが普通のじや持たないな。ミスリルを使うか。連射が効くようにマガジンも用意しう。

「ファイル、やるぞ」

「はいっ！」

それから、アテナも加わり三人一緒に魔法式アンチマテリアルレールガンを作り上げた。威力は極悪で火と水のスクウェアの防御を問答無用に打ち壊した。

「なんだこれ！」

「最強のメイジ殺しどうね」

「暗殺にもつこい」

射程は約3リーグ（キロ）で弾数は6発。威力は金すら打ち碎く。弾丸は鉄を使用しているけどね。金なら更に強くなるだろ？

「よし、名前は殲滅者ディザスターだ」

「「あ～」」

「あつ、魔法弾を作つてみた」

アテナから渡されたのはファイヤー・ストームが入っている。火火風かな。発動地点に高温の炎を・・・・ぶつちやけナパーク弾だな。ゼリーの変わりに魔法だけだ。

「ライフルは量産するか」

「止めておきましょ。強すぎまゆ」

「ん、平民に装備させたいんだけどな・・・よし、特務部隊は作る気だつたから連中に装備させよう。裏切らないし裏切れないと、呪いをかけられればいいだろう」

「それなら・・・・・」

「じゃあ、早めに見繕う」

一  
頼む

人材探しはアテナの仕事だ。まあ、既に大量の白竜とか黒竜を作り出してるがな。

「ヘンツム」、やじゅん

わかつた。 フイルは手伝つて

「何するんだ？」

秘密

まあ、いいや。そういうえばそろそろ誕生日だな。プレゼントどうしようかな。指輪はまだ早いしな。ああ、アレにしよう。やっぱり似合つてたしな。よし、ついでだから特殊繊維でも開発するかな。



## 三話（後書き）

城はアークで決定。名前どうするか悩み中。

感想設定を変更しました。コーナー以外からもいけるようにしました。

四話（前書き）

ウェーラーズとジェームズが間違つてた！一直しました。

あれから、一週間がたつた。誕生日プレゼントも大切だが、領地経営も大事だ。だから、ミシンや街灯、軍艦（超電磁砲搭載型）の設計図を渡した。施設は新しく寺子屋（子供全員参加）、銭湯（温泉）、軍事施設（管制室や竜騎兵訓練所、軍事基地）なども作った。

アテナから頼んでいた件で呼び出しを受けたので行ってみた。アテナが見付けて来たのは、手足が無くなつた少女達だった。

「これは？」

どの娘も眼に絶望がある。人生を諦めているようだ。まあ、この世界なら仕方ないかもしないな。

「要望の品。手足を治せばいい。ヴァルキュリア戦乙女達の依り代に使えるから。ほとんどの娘は親にも見離され精神が壊れていて、ほって置いたら死ぬだけだから」

「成る程、確かにこのままだと戦乙女達が使えないからな」

フィルのように融合させれば多少力は落ちるが、人間と変わらない姿になるし任務に色々便利だ。

「じゃあ、お前達にもう一度自らの身体で自由に動けるようにして

やる。覚悟はいいな？適合率の関係もあるから万全じゃないがな

「 「 「 「 ． ． ． ． ． ． ( ) 」 」 」 」

戦乙女を召喚して彼女達と融合させる。

それから、三日がたつた。彼女達の何人かは死んだが半数以上に融合に成功して手足を再生させている。

中には精神が元に戻った子もいる。全体的に身体能力が馬鹿みたいに高いし、カンピオーネの体质も劣化しているが再現している。

「アルカイド様、能力測定終了しました」

執務室で仕事をしているとファイルがやって来た。

「どうかな？」

「忠誠心も問題無いですし、単体による飛行も可能でおかつ魔法が無詠唱で放て、各技術の習熟度が異常に早いです」

副作用か何かしらないが、平民だったのに魔法が使えるようになつているみたいだ。

「後、杖がいりませんね。存在 자체が魔法のような存在ですから」

「ありがとファイル」

「いえ、気にしないでください」

ファイルに彼女達の事を頼んだからな。

## 「ソン」「ソントノツク

「失礼します」

「来たわよ」

クレスメントの『両親がやつて来ました。もちろん、呼んだんだけどね。

ちなみに、執務室はノツクだけで誰でも入れる。一々返事するのが面倒だからな。怪しい奴は領地に入った瞬間猫達がマークするから問題無い。排除は戦乙女ヴァルキーリア達が行っている。

ジークフリートには軍隊を任せている。ブレンヒルトには秘薬の生成とアテナと一緒に靈薬の開発を頼んでいる。

「進行状況は?」

「戦艦が2割、空軍が6割、陸軍が3割だ」

「秘薬のストックは問題無いわ。靈薬に関してもアテナ様のお陰でかなり進んだけど、生成になるとまだまだ時間がかかるわ」

靈薬はエリクシールとか生命の水とか言われている奴。世界樹が作りだす膨大な魔力を使って作り出している。

「副作用で平民でも魔法が使えるようになるかもね」

「つー」

ブレンヒルトからとんでも発言がでした！

「始祖が魔法を広めた方法ってエリクシールなんじゃないかしら？」

「有り得ですね」

「まあ、そつちは任せた。呼んだ本題に入るけど、一人で少女30人を鍛えてくれ」

正確には34人が戦乙文化ヴァルキュリアに成功したけど、4人は政治をまず学ばせるからな。

「「「」」の以上仕事を増やすと?？」」

「ひつー！」

フィルが恐怖で震えた！いや、猫やフクロウもだけどさ。わからなくも無いよ？普通の人なら氣絶するよう殺氣を放っているからね。

「軍の物資とかならこいつちでやるし、投げられそうなら部下にでも投げたらいい。後進の成長にもなるしね。秘薬は部下に任せっこつちに専念して欲しい。靈薬はアテナがやるだろ？」「

「わかった」

「ええ。なら、これもお願ひね」

「おい」

大量の書類ですか？まじで政治組欲しいな。フクロウ達の情報によるとガリアのジョゼフとトリステインのマザリーニ、ロマリアのヴィットーリオが凄いみたいだな。三人をこいつらの部下として送り込むか。一人は早急にアテナと俺で仕込む。

「わかった。よろしく頼む」

「「ああ」」

二人が去った後、俺は竜騎兵に量産したライフルを配備した。これは平民の竜騎兵に持たせるためだ。ワイバーンもアテナが白竜や黒竜に進化させたし充分数が足りている。

「ファイル、悪いけどアテナ呼んできて」

「わかりました。後、お茶を入れてきますね」

「頼む」

それから、三人で書類仕事に追われた。でも、紙や米、茶葉の生産に成功したのは嬉しいな。

仕事が終わった後、アテナに手伝ひよつこ（元）（元）言われていた  
ので私は自分の工房に今す。工房には大量のマジックアイテムと作  
りかけのアイテムが無造作に置いています。私は、マジックアイテ  
ムを作るのが趣味なのです。今は魔剣を作っています。

「ファイル、開けて」

「アテナ？少し待ってください」

扉を開けると大量の道具を持ったアテナがいた。

「どうぞ」

「うん」

お茶を出して、一息ついてから話を聞いてみます。

「お兄ちゃんに誕生日プレゼントを作つてあげたいの。今まであげ  
てなかつたから・・・・・・」

「そうなんですか？」

「今まであげるものなんて知らなかつたから」

「わかりました。じゃあ、一緒に作りましょう

「うん」

話を聞くと、この黒い鉱石を使って何かを作るみたいです。

「うん、作業はこれを使う」

「…………これはスキルール？」

「うん」

スキルールは古代の魔法人形で、人間の血を元にその人間を外見、性格、能力すべてを完全に複製できる。希少価値も高く高級品なんですが・・・・・堆く（うずたかく）積まれています。

「これを使うの？」

「うん・・・・・死ぬから・・・・・」

「今なんて・・・・・」

「死ぬかも知れないから人形で代用する。私の力は模倣できなかつた」

それは・・・・・神の力まで模倣できるはず有りませんよね。

「まあ、いいです」

アテナにもプレゼントをあげないとダメですね。

月日が流れて二ヶ月がたつた。全ては順調に進んでいた。しかし、いきなりウェールズ・テューダー・・・・・・・つまり、兄上がやつて來た。嫌な予感しかしないぞ？

「どうしますか？一応、応接間に通して起きました」

「はい」

仕事を片付けてから応接間に向かつた。

応接間では、ウーリーズがお茶を飲みつつ本を読んでいた。応接間にはライトイノベルとか書いたのを並べてある。どうしても、時間がかかる場合があるからね。

「やあ、お邪魔しているよ」

「何しに来たんだ？」

「そろそろ貸したメイジ達を返して貰おうと思つたんだよ。後、この本・・・・ヘルシングだつて？面白こね・・・・特にこの銃がね」

「そりだろ・・・・・・つて、それだけじゃないだろ？」

「ああ。父上が君達の誕生日パーティーを開こうとして出したね。だから、王城に来てくれ」

「こきなり何言つてるんだ？この六年間何もしてこなかつたのに」

流石に一歳までは結構来てたけどね。

「父が君達の所にいけなかつたのは、僕の母親のせいなんだけれどね

「関係無いな。俺もアテナも父上に興味は無い」

「・・・・・・それでも、来てくれないかな？」

「まあ、いいや。行くだけ行くな」

まだ、独立する力は無いからな。祝つてくれるなら祝つて貰えればいいや。

「わかった。君達のメイジのランクは？」

「トライアングルだな」

「その歳でトライアングルとは優秀だな」

「それで、いつ行けばいいんだ?」

「三日後だな」

なら、普通に行くか。守護の盾戦艦イージスでな。

三日後。擬装を行つたイージスでロンディニウムのハヴィラント宮殿についた。当然、王城にある専用の港に止めたぞ。

船員（ヴァルキュリア 戦乙女）に見送られて船を降り、案内に従い王の部屋に向かつた。

父上、ウェールズ兄上、アテナと三人で、しばらく雑談した後本題に入った。

「それで、なんの用ですか?」

「うむ。お主等に一人に婚約の話しが来て、『断る』……アルカイドにはトリステインのアンリエッタ姫とガリアのイザベラ姫かシャルロット姫だ。『だから』アテナにはゲルマニアの王だ」

話しを聞きやがらねえ!

「断るって言つてたのだろうが!!」

「何を言つている。これは王族の義務だ」

「私はお兄ちやん以外に興味ありませんから」

アテナの言ひ通りだ。多分、皆殺しにするんじゃないか？

「どうか、俺とアテナは既に結婚しているぞ」

「えつ？」

「なんだと？」

「ロマリアの司教にお金を払って、始祖に誓つたな」

「そうですね」

あれはアテナが墮ちた後、直ぐにやつたな。年齢なんて黄金でござり押しした。光の国とか言われてるけど賄賂次第だからな。

「くつ、勝手な事をしてくれたな・・・・・・」

「当然だろ。俺とアテナは一人で生きているんだからな」

「なら、アテナはお前の好きにしろ。しかし、お前にはトリスティンかガリアに行つてもうつぞ」

ちつ、これは仕方ないのか？まあ、こざとなればどつともなるな。

「まあ、どつちかは好きにわせてもうつよ

「うむ」

「後、領地はそのまま頂いていいから。それに、小さな浮島も貰つていい?」

「ふむ・・・・・まあ、よい。所詮、デブリだからな

よし、大量の細々とした土地も浮いているからな。そっちには、使い方は今の所無いんだろうな。でも、俺はあるから欲しいんだよな。

「明日のパーティからお前達は王族となるからな。その者に学べ」

紹介されたのはきっとそうな眼鏡30歳越えの女性だ。

「私にお任せください」

面倒くさがりうだな。まあ、もじらつものは貰つたからな。

それから礼儀作法を習つてている。

「いいザマスか?」  
「いいよ! いつかねザマス

少しボロボロになっているザマス眼鏡。

「んっ、ひつです

「ああ

今は、ダンスの練習をしている。最初はザマス眼鏡が俺に教えようとしていたが、アテナが乱入して俺の相手を奪つた。嫉妬かな? フィルとは何やつてもこんな事は無かつたのにな。

「違いますー。そりではありません！」

「ぐだらない」

「こちらの方がいいな」

俺とアテナはザマス眼鏡を無視して、好きに踊る。といつてもアテナが教えてくれる神々により精練されたワルツだが。数千年の叡智を蓄えている女神に人間の技術が敵うはずが無い。

それから、ザマス眼鏡は無視してアテナに色々質つた。

そしてその晩日付が変わるころ、バルコニーにアテナとフィルに呼びだされた。

「お兄ちゃん」「アルカイド」

「誕生日おめでとう」

二人から渡されたのは、一振りの剣だった。鞘は黒く豪華な作りだし不滅などの様々なルーンが刻まれている。引き抜くと刀身も全て真っ黒でルーンが刻まれ、引き込まれるような美しさがする。さらに、剣の刀身からは死を感じさせる膨大な魔力を発している。

「これは・・・」

「はい、私がアテナより提供された黒耀石で魔剣を作りました」

「正確には、私の知識にあるエクスカリバーと同じ製法をさらに改

良して作りました」

つまり、アテナとフィルが作りあげた漆黒の聖剣エクスカリバーと言つわけか。しかも、即死効果付きの馬鹿げた魔剣だ。

「ありがとう」

「喜んでもらえてよかったです」

「うん」

「じゃあ、これは俺からだ。おめでとう」

アテナに左右が尖った帽子を渡す。はい、アテナが初登場した時に付けていた帽子だ。勿論、服とセットだがな。特殊纖維でできているしカウンターまで施してある。

「では、私からアテナとアルカイドに指輪をあげます」

一つの指輪をフィルが渡してきた。そして、左手を差し出して来る。

「わかった、ありがとうございます」

これはファイルに関しても覚悟を決めるしか無いな。アテナに関してはとつに決めているしな。だって、俺の意思で無理矢理連れて来ただからな。だから、とつと結婚だけしといた。

「」「」「」

一人の左手薬指に指輪を嵌めた。そして、二人が一緒に俺の左手薬

指に指輪を嵌めた。

「必ず幸せにするから、これからよろしくな」

「「まー、もういいや」」

さて、俺達の為にトリステインやガリアは利用せねばいけない

が。

## 三人称Side

豪華絢爛な誕生会が行われる。その出席者も各国の王族や公爵家などの大貴族だ。

トリステインからは、トリステイン国王、マリアンヌ、アンリエッタ、ヴァリエール公爵、カリーヌ、エレオノール、ルイズが来ている。

ガリアからは、ガリア国王ジョゼフ、シャルル、シャルロット、イザベラが来ている。

ロマリアからは、マザリー、カルロが来ている。

ゲルマニアからは、アルブレヒト三世、ツェルプストー公爵、ハルデンベルグ公爵が来ている。

アルビオンからは様々な貴族が新たに王族と認められた双子に取り入ろうと集まっている。モード大公、マチルダなどが来ている。

各自が挨拶をしている。

「アンリエッタ、元気そつで何よりだ」

「ウールズ様！」

キラキラと恋する目を向けるアンリエッタ。しかし、ウールズのそれは親戚の子供に向ける慈愛のような物だ。

「ウールズ殿下、御謙遜のよつで何よりです」

「トリステイン国王陛下に、ヴァリエール公爵もお元気なよつで安心しました」

このような会話が行われている中、ジョゼフはパーティを抜け出していた。シャルルはそれを追つて行く。

ジョゼフが宮殿を歩いている中、目の前を歩く幼い少女を見つけた。その少女はガリア王家の特徴である青く長い髪を赤いリボンで装飾し可愛らしさを出している。マントこそ身に付けていないが、その身に付いている青を基調にした服はローブのよつだ。そして、彼女が持つ長い棒状のような物もローブと同じく高価な品のよつだ。

「ふむ、どうするか？」

「兄さん、何してるので？」

「シャルルか・・・」

少し嫌そうな顔をしたジョゼフは、見ていた者を教えてやる。

少女はパーティに運ばれる料理などから、紅茶とお菓子を載せたお盆を片手に持ち来た道を引き返す。他のものも止めはしない。

「彼女は・・・・・まさか、僕らの親族？いやまさか・・・・・・

」

「おい、シャルル、ディテクトマジックをかけて見ろ」

「兄さん・・・・・いや、わかつた。ディテクトマジック

表示されたのは、彼女の身につけているローブや杖のような棒状の物、指輪からでる膨大な魔力だ。使われている素材はどれも超高級品に間違いない。

「詳しい効果は何故か判らないけど・・・・・凄い力だ」

「ふむ、付けてみるか」

「兄さん・・・・・」

シャルルの咎めるような視線をジョゼフは一切気にしない。

「仕方ないな」

「お前も気になるのだろうが」

「それはね」

そして、娘と同じくらいの幼い少女をストーキングする一人は危険人物間違いなしだ。

庭園の休憩所で七歳くらいの美形な少年と可憐な少女がチェスに興じていた。

「ルーク」

「ビショップ」

盤面は少女が優勢のようだ。

「くつ、ならここだ」

「む、流石神殺しカンピオーネ・・・・・如何なる状況でも勝利を得る道を見付けますか・・・・・・三手後に詰みですね」

「勝った」

はつきり言つて、ただの遊びにカンピオーネの力を使うなど、明かな力の無駄遣いだ。

「ただいまです」

「お帰り。そして、後ろのは?」「

「え?」

「やあ…」

「貴様のせいで見付かつたじゃないか」

「兄さんのせいだろ！」

兄弟喧嘩を放置して紅茶を飲む三人。それに気付いた一人は喧嘩を止めて、三人に近付いて行く。

「ゴメンね。その娘の素姓が気になつてね」

「青い髪はガリア王家の特徴だからな」

「私にはわかりません」

フィル自身、本当に理解していないようだ。

「眼の色も違うから血が入つてるだけじょ」けど

「しかし、碧は青とも言つがな。だが、そんな事より一戦しないか？」

ジョゼフがチェス盤を指差す。

「いいよ」

「じゃあ、君は僕としない？」

「興味無い」

アテナはシャルルの誘いを素つ氣なく断り、アルカイドの膝に座り身体を預け本を読みだす。

「…………君はどうだ？」

「そうですね…………」

「やつてあげたら？」

アテナの頭の上に顎を乗せてチエスを打つアルカイドがフィルを促す。

「わかりました」

少し、時間が流れでへこんでいるジョゼフ。フィルとシャルルの対決はフィルが劣勢だった。

「あう、もう手がありません…………」

「クイーンを5ー1!」

「おや、相手になつてくれるんですね」

アテナが本から眼を反らさずに、フィルに指示を『えていくと見る見る形勢は逆転しフィルの勝利となつた。

「フハハハハ、良いぞ!俺をここまで楽しませてくれるとわな!」

「兄さん…………」

「うるさい奴だ」

「あの、もう時間ですよ?」

「 「 「 「あつー?」」」

ジョゼフとシャルルは急いで戻り、アテナとアルカイドは準備を行つた。

所変わり、賑わつてゐるパーティ会場。よつやく、出席者も揃いパーティは本格的に始まろうとしていた。

「この度は余の息子と娘のためにわざわざ集まつてくれた事、感謝する。それでは紹介しよう。余が息子アルカイドと余の娘アテナじや

「

盛大な拍手と音楽が鳴る中、人々は期待と不安、見定めよつとする。

「・・・・・?」

「来ない?」

「どうしたんだ?」

そう、奥から誰も来ない・・・・いな、一人の青髪の少女が会

場の真ん中に向かい、何か丸い物を投げた。

「なつー。」

皆が慌てて避けると、丸い何かから色とりどりの煙りが出て來た。近衛が杖を取り出そうとした瞬間、ボフンと言ひ音と共に煙りは消えた。そして、真ん中に現れた一人の人影。

「はい、種も仕掛けも無い空間転移でござります」

とお辞儀するアルカイド。わざわざシルクハットまで用意すると言う徹底具合だ。しかも、そのシルクハットから次々と猫が出て来て子供達に甘えだす。

「可愛いー」

「凄いー」

子供達は惜しみ無い拍手を送る。大人達はいきなり出現した事にどきもを抜かれていた。

「くつ、くくく、やつてくれるぜ」

「やつぱり、あの娘達がそ娘娘だんだね」

ジョゼフとシャルルは直ぐに立ち直ったようだ。

「おや、余り受けて無いようだ」

「お兄ちゃん、私は楽しかったよ

「ありがとう」

「あははは

ウェールズは乾いた笑いをした。

「貴様等、何をやつているか！」

かなり立腹だ。なぜなら異端審問に賭けられても文句言えないからだ。

「何つて虚無（嘘）を使った奇術だけど？」

「ふざけ・・・・・」

「・・・・・虚無だと！？」「・・・・・

会場中に大音量の叫び声が鳴り響いた。

騒然となつた会場。嘘だと思っている連中もいるが、囮まれた中いきなり現れた二人。

審議はともかく、二人の圧倒的で引き込まれるような美貌に二人が放つ圧倒的な存在感。さらに、ディテクトマジックにより感じられる膨大な魔力は始祖の再来と信じてしまいそうになる程だ。

「飽きた」

「そうだね」

その言葉と同時に嘘のよつに一瞬で霧散する存在感や魔力に会場は静まり返った。

「二人共、やり過ぎでは無いですか？」

「フィル、お疲れ様」

「そうかな？」

アルカイドはフィルの頭を撫でてやる。フィルは無表情を綻ばせながら喜ぶ。

「よつ、お前等ガリアに来ないか？今なら娘も付けてやるわ」

「お父様！？」

「狡いぞジヨゼフーそれならシャルロットはどうだー」

差し出されたイザベラとシャルロット。一人は確かに可愛い。

「だが断る！」

「」「」「

「チエスで勝てたらいいぞ」

「やつてやるー！」

「兄さんはやつさやつただろー次は僕だ！」

カンピオーネは神を殺してなる存在。神を殺せるのはカンピオーネだけ、その逆もしかし。数億、数千億分の一の確率でただの人が神に勝利する事もある。つまり、彼等は神を倒せと言わわれているのだ。

「どうせ無駄だから気にしなくていい」

「おー一人はこつちで遊びましょう」

「「うん」

チェス盤を一つ出して、一面打ちをしだすアルカイド。相手がジョゼフとシャルルだと言うのに一切引いていない。

「これで終わりだ！ チェックメイト！」

「「ぐはっ！？ もう一回だ！」

「無駄無駄無駄！」

明らかに使う場所が間違っているし、無駄にかつこよく言っている。

そんな事をしていると再起動しだした大人達は一人・・・・いや、青い髪のフィルも見ていている。

アルカイドは今だ一人を相手にチェスをしているし、アテナはそんなアルカイドの膝の上で実況している。フィルは子供達と遊んでいる。

「おー、虚無と言つるのは本当か！」

貴族の一人が思い切って聞いてみたようだ。その事に会場中が聞き耳を立てる。

「嘘」

その言葉に何処か安心する人々。そして、怒りを感じる存在もまたいる。ロマリアなど

「かどうかは貴方達自身が決める事」

次の言葉により、さらに混乱させられる人々。本人達は虚無かどうかという問題をばらまくだけで、否定も肯定もしないと言っているのだ。

「ふ、ふざけるな」

「ふざけていない」

その貴族は姿勢も変えず、こちらに見向きもしないアテナに怒ったようだ。これは、神として受け答えしてくれるだけアテナは寛容なのだ。本来の神にとつてただの人間など路傍の石や微生物程度でしか無いのだから。

その貴族は顔を真っ赤にしてアテナに掴みかかるとした。

「下郎が汚い手で妾に触れるな」

貴族の手がアテナを掴もうとした瞬間、貴族をアテナが絶対零度の視線で一睨みすると、瞬く間に貴族は石となつた。これはアテナの

力の一つでメドウーサと同一視されたために使える石化の力だ。

「おじおじ・・・・・」

「無詠唱でこれかよ・・・・・」

「王族に手をあげたため、処罰いたしました。お騒がせしてすいません。運び出せ」

「はつー。」

悲鳴が上がる前にウォールズが見事に処理して見せた。

「貴方、今の力が本当なら・・・・・・・・・」

「ああ、カトーレアの事をどうにか出来るかも知れん」

「しかし、難しいようですね。あの娘は、あの少女とアルカイド王子以外の人間・・・・・・・・家族ですら取るに足らない存在と見ていいよつですね」

相当怒っているのか、握っていたグラスが粉々になつていて。

「落ち着け、アテナ姫が無理ならアルカイド王子から接触すればいい」

「そうですね。それに、アテナ姫はアルカイド王子にお熱のようですね」

「そうなのか?」

「はい。あれは愛している人を見る眼です」

それは的を射ている。というか、アテナの瞳にはアルカイドとフィルしか写っていない。かろうじてウェーレズを捉えているかどうかなのだから。

「しかし、今いくならあっちだな」

「ええ。ルイズ、あそこにアンリエッタ様と一緒に行つて遊んできなさい」

「わかりました母様！」

まずはフィルから攻略するようだが、トリステインの王族が一番偉く、次にヴァリエルが偉いと思っているルイズを送るのは間違っているのかも知れない。

そして、時間は流れ解散となつた。アルカイドの戦績は42戦42勝だった。



## 五話（後書き）

さて、何処にいくか悩み中です。

こんばんは、誕生日会から間諜が沢山入って来て困っているアルカイド・シンフォニア・ド・アルビオンだ。まあ、召喚した猫達が見付けて戦乙女達<sup>ヴァルキリア</sup>が全て始末しているがな。

あれから、早四ヶ月も立っている。当然、色々言われているが無視している。

「お兄ちゃん、それでどうするの？」

ちなみに、アテナが言っているのは暗殺や引き抜きなどのために密偵を派遣しようと言つ話しだ。情報収集は猫とフクロウで行けるからな。

「ジークハルトとブレンヒルトに預けていた娘達はもう充分育ったみたいだし、彼女達を密偵として派遣する」

まさか数ヶ月でスクウェアクラスの魔法とメイジ殺しの技術を物にするとはな。

「内訳はどうしますか？」

「六人五組に編成して、アルビオン、トリステイン、ガリア、ロマリア、ゲルマニアに一組ずつ派遣すればいいと思いますよ。偏在で

五倍になりますから

フィルの意見がベストだな。アテナも賛成しているしみたいだしな。  
それにもしても、このお茶は美味しいな。しかし、お茶を飲みながら  
決めていいことなのか？

「では、それでいい。下水などの衛生施設も完成したし、稻や麦の  
栽培も問題無いよな？」

「それに茶葉やお酒も順調。私の力で大きさや栄養、成長速度も五  
倍にしてあるから」

「…………」

「流石、豊饒の女神だな。農作物にすらチートができるとか反則だな。  
流石、神様。

「じゃあ、他は何かあるか？」

「私は無い」

「私はありますよ。アルカイドが言つていた料理の再現は叶いました。  
シヨウゴにミソ、ミコン、スシスなどの調味料もできましたか  
ら」

「マジで…」

「はい。今日の夕食に出ますので、味の確認をお願いします」

「わかつた！」

この世界の料理は「ツテリしすぎだし、殆どが焼いたりした肉とかだからな。麦が出来たなら、小麦も可能だし、パスタもできる。色々と夢が膨れるな！」

「子供ですね」

「子供だからな」

「本当に子供なのかな？」

はつ、ははは。まだ俺達は八歳ですよ？子供に決まってるじゃないか。

「マセでますけどね

「既にこいつばしてるから今更だよ

五歳から毎夜エッチばかりしているしな。基本30だから激しくなるけど。

「まあ、私は気持ちいいからいい

「そうですね

男として嬉しい限りだよな。だって、両手に花だぞ？まあ、無理矢理そうしたと言うのもあるけど、据え膳食わねば・・・・まあ、違うかも知れないけどいいや。気にしない。

「アップルパイが届きました」

「美味しいぞう」

いつの間にか届けられたアップルパイをフィルが切り分けている。

「「いただきます」」

「アテナに感謝を」

「えつ？」

「いや、神に感謝をつて言ひじゃん？ブリミル教だと始祖ブリミルに・・・・・つて言つけど、神様が目の前にいるんだからな」

「神殺しの魔王が何を言ひのですか？」

「そうですね。理論的におかしいと思いません

「確かにそうだな。どちらかと言えば食材に感謝だな」

「「はー」」

それから、三人でアップルパイを美味しく頂きました。といふか、精神力が上がったんだけど、絶対この黄金色の林檎のせいだよな。

更に月日が流れ四年後、12歳となつた。

魔法だが、俺達は8歳の内に全属性スクウェアとなつたので、スクウェアの最年少レコードを塗り替えた。俺とアテナに関しては虚無との噂も広まつてゐるしな。

次にアークの軍事力だが、竜騎士に火竜や風竜の倍以上の大きさで、上位存在たる闇竜<sup>ターカネストラヨウラゴン</sup>に光竜を用意した。闇竜にはメイジ部隊を搭乗させ、光竜には平民にライフルを装備させた。ちなみに、どちらもブレスを吐くし、闇竜は攻撃よりで、光竜は防御よりだ。

戦艦はナデシコを開発した。といつても、武装はレールガンがメイン装備だがな。グラビティーブラストは土メイジの協力の元、磁力により超高速回転装置、ジャイロのような物を作り出しエンジンにした。風石無くとも空を飛べる優れものだ。こいつを旗艦にして、イージス艦を多数作り防衛艦隊とした。

そして、これが大事だよな。ラピュタに標準装備していたゴーレムみたいなのを造らなくてはいけない。というわけで、ミスリル製のゴーレムを作り上げた。

「どうしようか……」

「明らかに過剰戦力ですね」

「そなんだよな。そのせいか、間諜が馬鹿みたいに潜入して来ているんだけど、とりあえず殺してるけど」

この四年でやり過ぎたのか、アークは元の倍以上の広さになつてゐる。というのも、小さな浮き島などを集めてアークの四方に島を作り出した。それらを巨大な橋で繋いである。しかも、各属性に分け

た島となつてゐる。火は工業区、土は農業区、水は水産区、風は港と発電区だ。

そして、我が領地には列車が走つてゐる。そう、走行列車アハト・アハトがな。ああ、もちろん趣味だぞ。これにより、街では船、長距離移動は列車となる。

「これだけ発展すれば仕方ないでしよう」

「しかも各島に属性石も大量に混ざつてゐるしな」

「異端審問に掛けられても文句言えませんよ~」

「くっ、くくく。ファイル、連中は虚無かも知れないと思つてゐる俺達には手が出せないよ」

「馬鹿ですね」

「全くだ。さて、エルフはどうなるかな」

「エルフですか?」

「ああ、モード大公がエルフの妻を娶つて娘を作つていたそ�だ」

全く良くやるよな?人の事は言えないけど。

「そつちも氣になりますが、ガリアヒトリステインから催促が来ていますよ」

「面倒だな~、トリステインは貴族共を殺していいならいいんだだけ

どな

「ダメでしょう」

だよな。ガリアは兄弟対決だろ？めんどくさいわ。

「とか、アンリエッタも興味無いしな」

「いつそ我等でエルフを滅ぼしますか？」

「いいな。確か蛮族とか言つてたんだっけ？」

「はい」

エルフを支配して兵力化してしまえばかなり使えそうだな。砂漠を生産プラントにしてしまえばいいからな。聖剣・・・・・いや、漆黒の神剣を試すにはいいか。ブリミル教が聖戦を発動しても勝てない連中にたつた三人で挑むとか楽しそうだな。まあ、戦艦は使うだろうけど・・・・・良し、決まりだな。

六話（後書き）

エリア狩りになりそ�です

(前書き)

色々趣味に走っています。後、アテナちゃんをちょっと修正。

ハロー、エルフを狩りに行こうと思っているアルカイドだ。だから、エルフの住んでるサハラに行こうとしてるんだが、アルビオンの位置的にトリステインからガリアを通って行く事になる。ゲルマニアからも一応行けるが、色々面倒なので放置した。

ついでに、新婚旅行がてら各地を観光するぞ。

移動は場違いの工芸品であるトライクと言われるバイクを手に入れて、改造した戦闘用大型トライクだ。

原型はどこかの量産型兵器だが、土メイジやアテナの手によってエンジンを火石と風石の物に換装してある。馬力が異常に高く、普通の人間がまともに走らせるのは困難を極める代物になった。フロントカウルは走行中に取り外すことができ、内蔵されたグリップを保持して剣として扱える他、機銃を2門装備している。

うむ、ブラッククロッシャーライターに出て来たモンスターバイクだ。ゲーム内では時速は360kmが限界だが、風石を利用して風の膜を作り出してある程度風圧などを緩和出来るようになつたし、火石により馬力が馬鹿みたいに上がった上、土石をメインにタイヤを作

り上げた（ゴムは鍊金）し、フレーム等はオリハルコンやミスリル、ヒヒイロノカネを鍊金している。さらに、俺、アテナ、フィル、ジークハルト、ブレンヒルトによる全力の固定化を一日中かけて劣化を無くした。ガソリンやオイルは水石を碎いて液状にした物を変わりに使つている。全て循環型にしたため、魔力（精神力、呪力）を注ぎ込み続ければ無限に走れる。機関銃の弾丸は型容れによる複製を行つてある。（職人の手による鑄掛けは必要だが）打ち出しはレールガンと同じ方法だしな。まあ、このような改造により時速は560Kmまで出るようになった。

というモンスターバイクでトリステインの首都トリスターニアに向け街道を爆走中である。

「お兄様、気持ちいいな」

「ああ」

アテナがめんべくせくなつたのか、まつろわぬ状態に戻つて來た。まあ、お兄ちゃんからお兄様になつたのは許容範囲だ。だつて、一時呼び捨てだつたからな。いや、いいんだけどこっちのほうが・・・・・・そこ、シスコン言つたな！前の世界で妹がいなかつたんだからいいんだよ！」

「つと」

「きやつーやつぱり速すぎますー！」

はい、三人乗りしてます。前にアテナ、後ろにフィルが抱き着いてる。え？道路交通法違反？ハルケギニアにはそんなの無いし、そもそも時速400Km前後で走行中なわけなんで・・・罰金と免停確定だぜ？つと、前方に馬車を発見。

「速く無い。右に行くぞ」

「了解」

「はつ、はい！」

右に身体を一斉に傾けて回避した。因みに、盗賊や傭人などはフロントカウルを使い斬殺している。

「しかし、ナデシコやイージスなら直ぐではないのか?」

「こんな新婚旅行がてらの暇潰しを兼ねた旅行などに軍隊や護衛なんかいるかよ。邪魔なだけだし、アークの防衛力を下げるのも問題だ」

「アルカイド、本音は?」

「部下の前でイチャイチャ出来ないからな」

部下じゃないと気にしないがな。だから、帰つは迎えに来てもらつ手筈になつてゐる。

「そうか、確かにそちらの方がいいな」

「だろ?」

「襲われる事は・・・・・・」

「「我等に敵はおらぬ」「

「…………ですね。そもそも、最終目的地がエルフのいるサハラで、ぶどう狩りならぬエルフ狩りをしようとしてるんですからね・・・・・ふう」

なんか、フィルから疲れたような吐息が肺中に感じるな。

「む、前方に街を発見つけた」

「あ～確かに・・・・・あれがそそうだな。以外に速かったな

「そりゃ、こんな速度だしてれば速いですよ・・・・・」

「うかがな～？音速を超えた速度とか出せる権能があるからそんな速く感じないんだが、速度感覚がおかしいだけか。見る見るトリスティンの王都が近付いて来るしな。

「つと、ブレーーキと

ドリフトを決めて門の前に到着。あ～やつぱバイクは最高だな。

「な、なんだ貴様等はー？」

「おい、着いたぞ降りろよ

「いえ、身体が震えて・・・・・」

ふむ、フィルには刺激が強すぎたようだな。

「よつと」

「あう／＼／＼

抱き着いてるフィル事、ブラック・トライクから降りた。アテナは既に降りている。

「さ、貴様等、答えぬか！？」

「ま、亜人か！？」

「お、応援を呼べ！」

おや、包囲されてしまったな。とりあえず、エンジンを切るか。

「平民か？」

「いや、しかしロープを着ているからな。それに杖のような物も持つているわ」

確かにフィルは濃い青色の線が入った薄い青色のロープを着ている。青い髪に赤いリボンが似合っている。

「フィル、大丈夫か？」

「はい、ありがとうございますアテナ」

「気にしなくて良い。私とフィルの仲だ」

「はい」

アテナは大きめのダブルカフスシャツにセーターを着ている。下はミニスカートに「一ソックス・・・・見事な絶対領域が存在している。ちゃんと俺があげた帽子も着けてくれている。まあ、原作通りの格好だな。俺はブラツ ロックシューターのステラが着ていたノーマルの服だ。ただ、伸ばしていた銀の髪の為に総督のような感じがしないでも無い。これでツインテールにすれば総督で、黒髪にしてツインテールにするとステラだ。だからこそしないんだけどな。

「何事だ！」

「それが・・・・・

ピポグリフ隊が来たようだな。恐らく見回りかな？まあ、いいや。

「ふむ、いい加減目障りだ。そこを退け」

お、いつの間にかアテナが包囲を出ようと/or>ているな。一応トリステインには行くという一報は知らせたのだがな。

「ふざけるな！」

「ならば・・・・・

「アテナストップ」

この人、言靈じやなくてメドューサの瞳を使おうとしたやがったぞ。

「わかった」

「ふう・・・・・俺達はトリスター亞を観光しに来ただけだ。通してくれないか?」

「断る！そのような怪し来存在を操り、奇つ怪な服を着る物など通すわけには行かぬな。そうだな。その一人があい・・・・・ぐはあつ！？」

「あー、人の女に手を出そうとするとは・・・・・トリスターニアの貴族も墮ちたものだな」

アテナとフィルに汚らわし眼を向けて、ふざけたこと言つて来たからぶん殴つてみた。

「貴様、よくも！？」

「我等を侮辱するとは万死に値する！？」

あ～、いつばいだな。ビボグリフ隊の連中も集まって来たしどうしようかな？

「やうか、なりませにひみせぬ。教導にまかせり思ひなりな」

卷之三

一  
正めろ！

卷之三

言靈を込めて制止させた。いや、流石に他国ではまずいよな。まあ、一人に危害を加えるなら別だがな。

「あつた。えっと、私達はアルビオンから来た者です。これがアルビオン王家発行の通行許可証です。そして、こちらがトリステイン政府発行の通行許可証です」

「ほ、本物のようだな」

「しかし、ならなぜ……」

「いや、順番だろ。それに行きなり包囲されれば潰すのはあたまえだ」

他の人もいるし順番は守らなきやな。今はプライベートだから特にね。後は、王族として敵意を向けて包囲するのは問答無用で殲滅しても問題無い。これはプライベートだろうがあたまえだ。というか、バイクと俺、アテナの服には一応アルビオン王家の紋章が入ってるんだけどな。

「と言づわけで通させてもらひが」

「「はー・・・・・」」

ふ、ほうけてる内に入らせてもうつた。実際に何人かは今のうちと中に入つてたからな。俺達も堂々と中に入った。

トリステインの王都トリスターニアは、王城をはじめ白い石造りの

建物が目立つ美しい街だ。王城と貴族の屋敷、下町の間に大きな川が流れている。貴族・平民が多数生活しているが、街一番の大通りとされるブルドンネ街でも道幅は5メイルほどしかなく、裏通りのチクトンネ街には多数の酒場や賭博場もあるようだ。

「綺麗だけど狭いですね」

「私は臭くて叶いません」

「それにこれが大通りか？ 狹すぎだらう」

菲尔も表情には出さないがきつそうだ。アテナと俺は死にそうだ。というのも、中世だから仕方ないが排泄物の臭いが凄いのだ。流石に大通りや通り道には無いが、俺やアテナは鼻も効くのでかなりきつい。菲尔は少しいいがやつぱりきつい。アークは、地下下水や下水を浄化するのも問題無いので空気や臭いは問題無い。

「とりあえず、宿屋で休憩だな」

「そうですね」

「はい。バイクはどうしますか？」

「外部空間にしまつておくか」

四次元空間を作り出す魔法を開発して、指輪のマジックアイテムにしてある。そう、この結婚指輪だ。しかも、魔法発動体としても使える優れ物だ。いや、前々からなんで杖の形をしないといけないかわからなかつんだよな。出来るとわかつて有り難かったよ。

「しかし、風の膜で私達を覆つてないときつことは・・・・・・」

「まあ、上空から新鮮な空気を取り入れてますから大分しんどいですね」

「まあ、宿屋が決まつたらデートに行こひ」

「「はい」」

さて、王宮からアクションあるだろうな。めんべくそくて凄く嫌だがな。

予想通りというか、何というか。朝、王宮から任意といふの強制的な迎えが来た。

「あの……出来ればマントを付けて……

「似合わないから却下だ」

「いや、困ります！」

「知らん」

この服にマントとか無いわ。アテナの服なら許容範囲だが本人も嫌みたいた。

「わかりました……お連れ様はいらっしゃりでお待ちください」

ふむ、ファイル一人置いて行くのは不安だな。

「断……」「大丈夫です……わかった

心配には変わらないし、猫を置いておくか。

「では、いらっしゃりをお越しください」

そして、案内されたのは玉座。ただ、こるのはマザリー一極機卿とマリアンヌ王妃。後は適当な貴族達だ。

「あれが・・・・・アルビオンの虚無なの・・・・・か？」

「しかし、マントを着けていないぞ？」

「だが、見たことも無い服装だな。素材も良さそうだが・・・・・」

「

「ふん、女王陛下の前にあのような格好でくるとは・・・・・しかも、頭を下げぬとは無礼な・・・・・」

別にトリステインの王族に会つ必要は無かつたのに、強制的に連れて来られたしな。

まあ、自國で他国の王族に何かあると国際問題になる可能性もあるしな。だが、俺達に何かあっても一切の責任を追及しないので気にしないよつ連絡はしたんだけどな？

そして、マザリー一極機卿は頭が痛そうにしてこる。当然、他の國の王族を侮辱したりどうなるかわかつてゐよな？普通は心の中で言つもんだぜ？

「トリステインに良く来て下さいました。お一人だけでアルビオンからトリステインまで旅をして来るなんて偉いですわね」

・・・・・これは、放置でいいか。トリステインはマザリー二極機卿以外興味無いしな。手に入れるために策略は張り巡らすがな。そして、アテナの機嫌が加速度的に悪くなつて来てる。

「はい。お久しぶりですマリアンヌ女王陛下もお変わり無くご健勝のようで何よりです」

「いえ、私は女王ではありますよ」

「とにかく今は王位は現在空席なのですか?」

「そうです」

「うわあ、マザリー二極機卿は真っ青になつちやつたよ。皆さんはわかるよな?」

『玉座が空位なのは、王国として終わつている。外交的観点からも普通は即座に傀儡でも置くのが普通』

だよな。ただでさえ年々国力が下がつてているトリステインだからな。王がいなければ貴族を好き勝手するだけだし。しかも、空位の理由がマリアンヌ王妃の我が儘と来たもんだ。

『終わつているな

まったくだ。

「『』めんなさい、今アンリエッタは出でていて・・・・・・

話が飛んでるーまあ、スルーしてただけなんだがな。

「いえ、お氣になさりや」

「そうですね。アルカイド君、アンリエッタと結婚してトリステイ  
ンに来ませんか？アルビオン国王には許可を頃いていますしね」

『めん被る。

「ええ、国王からガリアとトリステインから側室[側室]でも構わないので  
娶れと言われていますね」

「「「「なつ！？」」」

ガリアを先にしたのは国力的に当然だ。

「我がトリステインの姫であるアンリエッタ様を側室などと無礼な  
！」

ああ～貴族共が五月蠅い。普通は外交問題になるが氣にしない。ど  
うぞ喧嘩売つてきて下さ」、滅ぼしますから。

『石像にすれば五月蠅く無いかな？』

五月蠅くは無くなるが止めてくれ。

『諒解した』

「それなら……『ガリアを選ぶな』……なつ、なぜですか!」

「決まっています。トリステインとガリアでは圧倒的に国土と国力の差が存在するからです」

「そんなはずは有りません!」

「「そうだ! 我等は負けぬ!」」

『馬鹿ばっか』

電子の妖精さんの有名なお言葉ですね。後、頭抱えているが大丈夫かマザリー二極機卿?

「といつても、ガリアの姫も第三になりますけどね。そういう意味で対して変わらないかな」

「それはどういう事ですかな?」

「第一后はアテナ、第二后はフィルがいますから。ああ、血を濃くするためにも父上からは問題無いと言わせてますから」

「第一の方は?」

「現状は平民?」

「「ふざけるな!?」」

割つて入つて来た貴族が五月蠅いな。トリステインの方がーとかね。

「黙れー・マコアンヌ様の御前ですぞー！」

マザリー＝枢機卿がいなくなつたトリステインは面白い事になりそうだ。

「あ、貴方は本氣で平民を口にすると言つてゐるのですか？」

「ええ、もうしました」

「・・・・・」

凄い形相だな。とりあえず、アテナの手を握つて落ち着かせよう。

「さて、マザリー＝枢機卿

「何かな？」

「トリステインはこのままだと、後何年持つかな？」

「それは、すづ、「こつまでもモシわー」・・・・・だそうです

苦労してますな。まじで可哀相。

「約21万アルパン（7万km<sup>2</sup>）しか無い国土なうえに、優秀な平民を起用しない事。さらに、税や法律の関係で年々国力が低下していることが分かつています。年々4%～8%低下していますし、今年はどうなる事や。」

「何を馬鹿な事を言つてこらー。」

「そんなはずは無からぬ。」

貴族は放置。マザリー＝枢機卿は驚愕しているな。これはアンタが計算したデータだぜ？

「これをどうにかするには改革が必要。あなたとあなたが婚姻でもすれば或いは……？」

「ふざけるな！鳥の骨などと一緒に！」

そう、アテナはマザリー＝枢機卿とマリアンヌ王妃が再婚すればどうにかなるかもと言っているのだ。確かにその方法がいいかもしね。

「まあ、そういう訳で俺がトリステインの王になるなら貴族の9割は肅正するな」

「「「つー？」」

「さて、そろそろ帰らせてもらひ」「待て」なんですか？

「何故」「今までの詳しく述べられている！」

チャンス。動転したのか、疲れているのだろうが、ここで言つてしまつたな？罵にかけてやろう。

「リリアは元気ですか？それと、おめでとうございます。貴方との子が出来たと報告が来ましたよ」

リリアって言つのは、トリステインに派遣した三人の戦乙女の力を  
ヴァルキュリア

持つ文官の一人だ。いつの間にかマザリー一板機卿と出来てたみたい。

「貴様、裏切ったか……」「

「待て、違う!」

「では、失礼します

「兄様、早くフィルと合流しよう

ああ。種は撒いた。これで変わらなければトリステインは滅亡する。  
後は、マザリー一板機卿が死なないよう護衛を一応付けておくかな。

フィルのいる部屋に戻ったが衛兵がいるぞ?

「貴様、よくもこの私にただではすませんぞ!」

「襲ってきた貴方達が悪いのです」

部屋の中は嵐が訪れたようにぐちゃぐちゃだ。そして、血を流しながら倒れている兵士達。中には緋色の円錐が床から多数生えていた。

「何事?」

乱れた服装を直していたファイルに聞いてみる。

「あ、アルカイド様っ！」

「どうした？」

いきなり抱き着いて来たぞ？

「この人達が急に襲つて來たんです。だから迎撃してしまいました。  
『めんなさい』

「いや、気にするな」

「ええ、悪いのはこの害虫ですね。自害しなさい」

アテナがそう言つた瞬間、俺達以外が自ら喉や心臓を刺して死んで  
いった。

「取り敢えず、そここのヒヒイロノカネを分解して次に向かうぞ」

「「はい」「」

それから、一時間後にはトリスター・アを後にした。田舎すはラグド  
リアン湖だ。



## 八話（後書き）

無茶苦茶くさいですが、トリステインを崩壊させるのはマザリーー  
がいなくなれば簡単じゃね？と言つ事です！そう、オレンジみたく  
！

マザリー——Inside

やられた……全てあの小僧の計算通りか。

今までの功績と私がロマリアの枢機卿でもあることで極刑は免れたが、国外退去を命じられた。これでは全王に頼まれたトリステインは……終わりだ。貴族の中でもともなのはヴァリエール公爵とグラモン伯爵ぐらいだ。グラモン伯爵は戦費で大変みたいだがな。

とりあえず、家に帰つてリリアを問い合わせるか。

私はトリスターにある邸宅に戻り、目の前にいる美しい少女リリアを問い合わせている。

「それで、あのアルビオンの虚無とはどうこう関係だ？」

「アルカイド様は、私達の主ですね」

あつたり認めおつてからに・・・・・私は用済みなのか?

「私に近づいたのは情報を得るためか?」

「いいえ。初めに私が貴方に近づいたのは勉強のためです」

「勉強だと?」

「はい。アルカイド様がハルケギニアを調査した結果、ガリアはジヨゼフ様、ロマリアはヴィットーリオ様。そして、貴方を含む三名が政治力に富んでいるため、私達が学ぶために派遣されました」

まさかそこまで評価されているとはな。しかし、ガリアのジヨゼフだと? 魔法が使えぬ・・・・・いや、政治に魔力など関係ないな。

「お前は・・・・」「云つておきますけど、命令で身体や心を赦した訳ではありませんから。私が貴方を好きになってしまっただけです。いいですね?」・・・・・ああ、わかった

それなら生まれてくる子に救いはあるか。

「それでどうしますか?私はシンフォニアに来る事をオススメします。貴方との子のためにも・・・・・・」

「しかし、先王との約束が・・・・・・」

「子と亡き先王との約束・・・・・・どちらを選びますか?」

私にひとつどちらも大切だ。あの小僧さえいなければ……いや、不可能だな。小僧がいなければリリアにも会えなかつたし近い内に限界が来る。

「…………しかし…………」

「貴方が教えてくれた事ですが、私が貴方に返しましょう。国とはなんですか？」

「国か…………國は民だ」

「なら、答えは簡単です。私達の領地に来てトリステインの民を受け入れてあげればいいのです」

そうだな。無能な貴族は邪魔にしかならない。

「しかし、問題はあるだろう」

「ありますか？」

「ああ。面積の問題はどうするのだ？」

「それは、アルカイド様とアテナ様に私達がサポートして作り上げた空間歪曲の魔法により実際の面積より、数十倍は広いので問題ありません」

く、空間歪曲の魔法だと！有り得ないぞ！？それは、始祖ブリミルの領域を超えているぞ！？

「落ち着いて。血糖があがります」

「あつ、ああ」

リリアが注いでくれた紅茶を飲み、一息をいれる。

「ちなみに、始祖ブリミルなんてあの一人にかかれば月と鼈です」

「おい！」

ロマリアの枢機卿の前でそれを云うか！？

「神に力を与えられたブリミル」ときが、豊饒と冥府の女神であるアテナ様、神を殺しその力を篡奪した神殺しの魔王たるアルカイド様に叶うはずもないでしょう

「ぶつ！？」

「何するんですか。気をつけてくださいね？」

「ああ。すまん……」

吹いた紅茶を綺麗に拭いたりと、リリアが世話を妬いてくれる。

「つて、神に神殺しの魔王だとっ！？」

「はい。間違い無く」

それなら、荒れ地だつたあの場所を一晩で緑と資源豊かな大地になつた奇跡にも納得が出来る。

「そして私は、神界より召喚された戦乙女<sup>ヴァルキュリア</sup>との世界の人間が融合した存在です」

「そうか・・・・・もついい。私はシンフォニアに行こう。お前と子供が幸福で、トリステインの民も救えるならもつ良い・・・・・・・今日は疲れた・・・・・・・」

私がシンフォニアに行かなれば、連中が何をするかわからん。事と次第によつてはどんなでもない事になるかもしれんからな。

## マザリー -Side Out-

まあ、三人だけだしいいか。一応、人払いの結果を張つておこうか。

卷之三

ГІДР

「尤尼」

渋っていたファイルの服を剥ぎ取り、裸にさせる。

「どうせ何度も観てるんだから・・・・・・」

「それでも恥ずかしいのです！？」もう・・・・・

ふくうーと穂を膨らませて いる フィルを抱えて 湖に連れていく。

「兄様。面白い存在がいる」

一  
え  
」

「ラグジュアリーホテルの精霊がいる」と聞いたことがあります」

水の精霊か面白そうだな。

「  
行  
く  
か」

隣にいる可憐で可愛く綺麗なアテナに声をかける。水のせいか、何時もより神秘的で美しく見える。まさに女神。

「諒解した。潜るつ

「はい」

三人同時に湖に潜つていった。

ラグドリアン湖の水は透明度が高く、とても綺麗だ。それに、大量の魚が優雅に泳いでいる。ダイビングスポットとしてベストだな。

「綺麗」

「ああ」

「いい気分です」

水の中なので、呼吸と会話が出来る特別なマジックアイテムを使っている。

じぱりく泳いでいると、湖の底に祭壇を見付けた。

「アメーバ?」

「あれが精靈でしょうか？」

「多分」

祭壇にはアメーバのような存在がいた。

『個なる者よ。我が領域に・・・・・神様と神殺しとは珍しい。何か全なる我等に御用ですか?』

『ばれてる上に、対応がいいな。しかし、調度いいな。姿はフィルになつた。どうやら、俺とアテナには恐れ多いと思つてゐるみたいだな。』

「用は一つ。妾達が支配する領域に来て欲しい」

「いいよ! 良い場所を提供しよう」

「水石も沢山あるので水の精靈様も気に入ると想います」

『諒解した。行くに当たつて願いがある』

「なんだ?」

『「我を眷属とし迎え入れて欲しい。されば、永遠の忠誠を誓おう。そして、肉体を用意してくれるなりま、盾や剣となるつ』

水の精靈でなぜか緑髪のなのなの云つてゐる水死体の少・・・・幼女を思い出した。

「いいだろ?。ただし、普段は俺のイメージする存在になれ

『諒解した。これより我は貴方に付き従おつ。調度、下らぬ個なる者に飽き飽きしていた所だから調度いい』

話しを聴くと、馬鹿な人間が精靈に身体の一部をもつと寄越せといつてきたらしい。だから、無視を決め込んでいたが、やはり五月蠅く、気晴らしがしたい時に俺達が来たようだ。

「リハはどうする?」

『しばりへは分体を置く。引っ越しの準備をしなくてはならぬからな

「なら、問題は無いな

『これから、よろしくなの

水の精靈が仲間になつたか。色々楽しそうになつそうだ。

## 九話（後書き）

ローゼンメイデンは取られていたからあの娘にしてみました。  
そして、マザリニーの引き抜き。アンチばっか読んでたせいか、あの国はダメだと思っているしまつ。そして、マザリニー可哀相だると云ひ訳で引き込んでみました。

トリステイン滅亡まで・・・・・あと、なんねん？

新たな使い魔静水久を手に入れて、ラグドリアン湖を堪能した俺達は一路、ガリア王国王都リュテイスに向かっていた。

というのも、ラグドリアン湖で遊んでいたら、南薔薇騎士団を引き連れたジョゼフが竜から降りてきて、俺達を拉致つたんだ。

そして、ガリア王国王都リュテイス近郊にあるヴェルサルテイル宮殿グラン・トロワに、連れていかれた。

グラン・トロワで歓待を受けた後、俺達はジョゼフの部屋に案内された。中にはシャルルまでいた。この二人って中悪いんじゃなかつたか？ そう、報告来てたんだけどな。

「で、何用？ どうせ来る予定だつたし、いいけどね」

二人は文通する中だし予定に入っている。メル友ならぬテニ友？ 内容は多種多様で、チエスの譜面を書いて対戦したりしている。

「ああ。用は簡単だ。お前の嫁のファイル嬢についてだ」

「私…………ですか？」

「ええ。その紙が気になつたので調べてみました」

「つむ。お前から預かつた娘が役立つた」

「三国に勉強の為に送つた三人の内の三一人だな。

「青い髪はガリア王家の特長でしたね」

「ああ。瞳が違うが間違い無く王家の血を引いている事が判明した。どうやら、過去に駆け落ちして出ていった奴の子孫みたいだ」

「わつ…………だつたんですか…………」

「それで、こちらの一つ目の要求としては王家に戻つて来て欲しい」

まあ、管理出来ない所に王家の血があると色々あるよな。特にガリア王家は始祖の血統だからな。

「こちらの見返りは?」

「結婚していくも、身分が低ければ面倒だろう。良からぬ事を考える奴もいるかも知れないが、背後にガリアがいるとなれば余程の事が無い限り問題無いだろ?」

「確かに。つづとうしい連中は黙るか」

陰口叩く連中は表立つて仕掛けっこないしな。

「一いつ皿はシャルロットを娶つて欲しい」

「それは、イザベラもだな。じつちの見返りは、十年後になるかも  
しれんがガリアを丸々やろ?」

「フィルがガリアの王族に名を連ねるなら、私達とのパイプは出来  
ますが、未来に不安が残るから全部纏めてしまおうという企みです  
か」

「ええ。それで僕と兄さんが争わなくて良くなります。娘の未来の  
為に協力する事が出来ますから」

「アッシュが云つていたからな。王や国の上層部に魔法はいらないと  
な。精々、いとしたら近衛と将軍くらいだろ? 身の安全は護衛  
に任せれば良いのだからな」

家の子はいい働きしたみたいだな。

「それだと、絶対条件としてアルカイド様はイザベラ様、シャルロ  
ット様を娶らないといけないんですね」

本人達の意思は無視だが、その辺は王族に生まれたんだから仕方な  
いだろう。まあ、調教でもして懐かせるか。それに大国ガリアの後  
ろ盾はデカイしな。必要かどうかは知らんがな。いや、武力ならい  
らないだろうけどな。

「さて、ゲームでもするか」

「いいね。トランプでいいかい?」

「「問題無い」「」

「なら、お二方も読んできますね」

ファイルがイザベラとシャルロットを呼びにでたか。

「しかし、ただ遊ぶだけでは詰まらんな・・・・・・」

「なら、いじつしよう。セバスチャン!」

「冗談」

執事服を来た20前くらいうの中性的な女性が入って来た。手のお盆には新品のトランプとボトルにグラス。はい、家が派遣した子です。

「なんでセバスチャン?」

「気に入ってるからです。それ以外は認めません」

「まあ、いいや」

「セバスチャン、悪いが執務室にある案件を持つて来てくれ

「承りました」

「負けた奴が案件を片付けて行くのか・・・・・・

「負けた奴が案件を片付けて行くのか・・・・・・

「子供を働かせるのか？」

「お前達は既に領地を経営しているしな。娘に関してはサポートありで構わん」

「ルールは？」

「大富豪だ」

大富豪は、トランプをプレイヤーにすべて配り、手持ちのカードを順番に場に出して早く手札を無くすことを競うゲームである。一般的に4・6人程度でプレイするのに適しているが、7人以上や3人でもプレイ 자체は可能である。2人では特殊な2人用ルールを用いることで遊ぶことが可能である。1人ではゲームが成立しない。1ゲームでの順位が次ゲーム開始時の有利不利に影響する点が特徴で、勝者をより有利にするゲーム性から「大富豪」という名称が付いた。ローカルルール（地方ルール、独自にアレンジされたルール）が多く存在することも大きな特徴である。ローカルルールにはゲームに変化を付けたり、カード交換を行うといったゲームの性格上から上位のプレイヤーが勝ち続けることを抑制したりする効果がある。

ローカルルールはカード交換無しの、負けた奴が仕事をすると云うことか・・・・あれ？俺達に特は無くないか？負けなければいいんだが。

「ガリア側に特があるだけでは・・・・」

「調味料とポテトチップスでどうだ？」

「諒解した」

調味料の確保は大変だからな。果物とかは豊富なんだけどね。ちなみに、アテナさんはポテトチップスとかスナック菓子が好きみたいだ。こないだ面白半分で製法をあげたら再現して、ガリアで売り出したんだ。すると、大ヒットだよ。濃い味が人気みたいだが。

「お父様、参りました」

「・・・・・」

二人を連れたフィルが帰ってきたので、本格的にスタートした。ちなみに、セバスチャンは給仕をしてくれている。

初めてから五戦程やつたんだが、ルール変更が来た。負けた奴じやなく、勝った奴が仕事（時間的余裕から）。負けた奴はセバスチヤン特製ジュースを飲まされることになった。

「Aの四枚・・・・・革命で上がりだ」

「・・・・・ちよつ・・・・・」

「嘘でしょっ！？私の手札が！」

イザベラの手札が死んだみたいだな。ちなみに革命は四枚同じカードを出すと行える。効果はジョーカーを除くカードの強さが入れ替わる事だ。

「…………3の4枚で…………革命返し…………上がる  
り」

「「シャルロット！」」

「なら、私がお兄ちゃんの後を継いで、更に革命」

「「う…………」」

さて、仕事はなんだ？

「「こちらが最後の案件です」」

エギンハイムからの依頼で、翼人を排除して欲しいか…………  
これは楽だな。まあ、ガリア次第だがな。

「ジョゼフ義父さん、シャルル義父さん、翼人つて貰つていっていいか？」

「ああ。構わないぞ」

「確かにそちらなら、有効に使えるね。なら、ガリアの方からアプローチしてシンフォニアを紹介しておくれよ」

「なら、これで案件は終了だな。次は何を賭けるか…………」

「私はお前達が乗っていたバイクが欲しいな」

「僕はイージス艦」

「贅沢だなこいつら！」

「私は魔法の指導書が…………いえ、何でも無い…………」

「…………本がいい…………」

「イザベラとシャルロットは可愛いな。」

「ポテトチップス・うす塩一年分」

「場違いな工芸品がいいです」

「アテナ、いくら太らないとはいえる…………どれくらいのペースで消費するつもりだ？ フィルは研究がしたいのだろうな。」

「何と言つが、大人一人、自重しろ」

「知らん」

「まあ、二人は金だせよ

「「ああ（うん）」」

それから勝負して、七千万エキューを巻き上げたが、イージス艦三隻、ブラックトライク四機取られてしまった。赤字だな。アテナがポテトチップスで満足しなければ黒字になつたんだがな。まさか娘を生贊にして勝ちに来るとは油断した。

「すまなかつた」

「僕達が悪かつたから・・・・・・」

「・・・・・・(ふい)」

まあ、拗ねた娘のご機嫌取りが大変みたいだからいいけどな。

イージス艦やブラックトライクは念話で戦乙女達ヴァルキュリアに伝えておいた。翼人はセバスチャンが交渉に云つて、交渉が上手くいけば安全なルートを使ってシンフォニアに行くみたいだ。

ちなみに、シャルロットにはハルヒの漫画を渡しておいた。シャルロットって長門に似てるよな？ イザベラは世界樹の枝で出来た腕輪をあげた。

「それで、新婚旅行はいいのだが、何処に行くんだ？」

見送りはジョゼフと、イザベラ、シャルロット。シャルルに仕事を押し付けたみたいだ。

「ちょっとエルフ狩りにサハラまで」

「おい・・・・・いや、いい。生きて帰つて来い」

「任してくれ」

エルフがどのぐらいの実力か、マジで楽しみだ。

「気をつけていってらっしゃい」

「また、遊んで・・・・・」

「ああ」

「二人共、元氣で」

各自適当に挨拶して、トライクに乗り、エンジンを入れる。

三人に見送られ、ガリアを抜けてサハラを目指す。

「「「「またな（ね）」」」



## ファイルSide

始めてファイル・ド・ガリア（？）です。

一応魔法は使いましたが、平民だったのと家名は有りませんでした。

こないだグラント・トロワに行つた時の帰りに、ガリア王にエリクシールを渡した時、正式になるよう云われましたのでこうなります。

まあ、結婚といつても、実は挙式はして無いので、まだガリアのままです。アルカイド様とアテナ様はしっかりと上げていますけど。

「さすがサハラ砂漠だ。暇だな」

そう、現在私達はサハラ砂漠をブラックトライクで爆走中です。ええ、誰も俺の前は走らせねえぜ！！のアルター使いのカッコイイお兄さんみたくフルスロットで走り続けています。念のために云つておきますが、私はアルカイド様が書いた漫画で読みました。多分、土と風のスクウェアでしょうね。

「確かに。久しぶりに神や神殺しと本気で闘つてみたいな

「確かに」

「何物騒な事を云つてるんですかー。フラグ立つたらどうしてくれるんですか！」

「そうは云つが、私は戦女神だぞ。このままでは鈍つてしまつ

そんな理由で神クラスの戦いをされると迷惑極まり無いです。

「そうだな。いつそ召喚してみないか？」

「有りですね」

「無しですかー？」

「「残念」」

全く・・・・無理でしそうが、エルフの方々を応援しましょう。  
少しでも気晴らしになつてもらわなければ困ります。

「あつ、人影だ」

「えつ？」

「それに街も見えるな

私には見えませんが、このお一人が云つなら間違ひ無いでしょう。

「お兄ちやん」

「ああ。撃つてきたな。これなら、遠慮はいらんな」

全速力のまま、突き進み、通り抜け様にブレードでエルフであるつ人を切斷。すると、10メートルものゴーレムが出てきました。それもブレードで終わりましたけどね。アルカイド様は五回斬つたら、内蔵のマシンガンで蹴散らして遊んでいます。

「馬鹿！？蛮族」ときの攻撃で我々の「コーレムが一撃だと…？」

「ひつ、来る…………さやああああつー？」

「死ねえー！」

「なんとしても止めりーー？」

「ぐはあつーー？」

「ゲイツツーーちくしょー、蛮族めーー？」

と、エルフの方々は大変みたいですね。なまじ身体能力がいいせいか、回避出来ない速度で迫って来るなんとかブラックライクが見えるみたいです。可愛そうに・・・・・一応、「ご冥福をお祈りします。そもそも、私達は蛮族らしいのでその通りにするよーです。

「到着ー」

「「「「つーー」「」」」

「どうやら、エルフの集落に着いたようですね。確かに建築技術などは高いようね。」

「ふむ、囮まれているか」

「当然ですね」

「ば、蛮族がエルフの領域になんのようだ！」

「聖地観光と」「エルフ狩り」

「「「「ふざけるな！？」」」

「ですよね。普通はそんな理由でこんな砂漠になんて来ませんよね。・・・・まして、本来なら先住魔法にカウンターまで持っているエルフが相手なんですから。」

「ふざけていながら・・・・誰が行くかじゃんけんでいいや」

「「はい」」

エルフ達を無視しつつじゃんけんした結果は、私がパーでお二人がチヨキでした。

「な、何をしている！？」

「戦う順番を決めただけだ。じゃあ、フィルがんばれ

「私達は見学している」

「ふう・・・・・・わかりました

「ふ、ふざけんなっ！？」

エルフ達が様々な魔法を放つて来ます。私はその全ての魔法に無詠唱で発動させた対抗属性の魔法をぶつけて相殺しました。

「フィルは何気に兇悪ですね」

「戦乙女の力でマルチスペルが使えるからな  
空で空中戦です。翼を開いた私は速いです。

「虚無まで使えるように改造しましたし」

私は水の力の結晶、水石を取り出し詠唱を開始する。エルフの攻撃は相殺出来ますから。物理攻撃は杖に仕込んだ連接剣で対応します。

「我が身より集え、氷神の槍よ、彼方より来たれ、銀氷の吐息・・・  
・逆巻き、連なり、空に座し集い固まりて、氷桔の塊を形成す、氷の塊は槍陣を成し、白銀の槍へと成る」

多数の水石から水を吸い出し、上空で氷に変換。

「無駄だ！我等に力ウンターがあるー！」

「そ、そうだ、こんな虚偽威し・・・・・・」

「普通の魔法ならそうでしょう。でも、大容量の物質重量などどうですか？」

既に上空には全長一-fiveメートルを超す強大な氷が形成されています。

「これで終わりです。ヘイムダル」

「「「化け物めええー!?」」「」

「私なんて他の二人に比べたらまだまだです」

落ちた氷の塊により、クレーターが発生し、トルフの街は壊滅しましたが問題ありませんね。

「やつ過ぎか?」

「カウンターを破る手つ取り早い手段とは思つが・・・・生き残りはいるのか?」

「奴隸にするんでしたね・・・・すいません」

皆殺しでは意味が有りませんし、それこそ野蛮です。

「いや、生体反応はあるな。ショルターにでも入っていたんだろう?」

「よかつた・・・・」

「では、私が捕らえよ!」

「頼む」

実は、この中で捕まえるだけなら、アテナは他の追従を許しません。

少しして、アテナがシェルターの上を吹き飛ばして、中に入つていきました。

「終つた」

一分もしないうちにアテナは戻つてきました。

「収穫は？」

「女が14匹、子供が男12匹女29匹だった」

「わかった。聞いての通りだ。回収しておいてくれ

『諒解。これよりイージス5隻による降下作戦を開始します。石像の回収はお任せください』

「頼む」

どうやら上空に待機していた護衛部隊に回収を頼んだようですね。

「アテナ、次の目的地は分かるか？」

「聞きました。あちらに真っすぐだ。そこにネフテス国アディールがあるらしい」

「じゃあ、そこだな」

「いや、その前にも集落はあるみたい」

「なら、次は俺だな。アテイールはアテナが好きにしり」

「感謝する」

と、いうか。これって6000年の快挙ですよね？ロマリアが聖戦を発動しても、突破できなかつたは場所にたつた三人で赴き、圧勝しているんですから・・・成る程、これがチートと云う奴ですね。

実際、ネフテスまでたいした脅威は有りませんでした。ネフテスは女神様の行進です。泣いて喜びますよね？崇めている精霊より、真正銘の上位者ですから。

エルフの姫Side

ネフテス国に住まうエルフ達の代表者・・・・・老評議会のメンバーは困り果てています。

「このよつな報告・・・・・信じられん・・・・・」

「い、偽りであろう！蛮人！としが我等エルフを敗るなどあつてはならぬ！？」

円卓を囲む美しい青年の方々が、届けられた報告について愚かな言い合いをしています。100歳も過ぎてゐるのに馬鹿ばっかです。

「静まれっ！」

「「「つー？」「」」

統領であるテュリュークさんの一言で、騒いでいた議員さん達は静まりました。

言い忘れてましたが、このネフテスの国はアティールが首都です。そして、この国は共和制です。そして、ここにいる皆さんのが選ばれた議員です。

「蛮人対策委員長ビター・シャル。この報告書にある三人の蛮人による進攻は確かか？」

「はい。この眼で私自身が確認した。しかも、三人の内の一人・・・・・・青い髪の子供が我々エルフの防衛部隊をたった一人で、一発の魔法で壊滅させた」

「馬鹿な！」

「有り得ぬ！」

「そうだぞっ！我等には蛮人にはない至高の精霊魔法もあるのだぞ！それに、カウンターだつてあるんだ！」

確かに、ハルケギニアの魔法でカウンターを敗る手段は虚無のディスペルだけでしたね。

「まさか、虚無か？」

青い髪の子供ならガリアの王族ですね。原作ならジョゼフ、ジョゼットですが、原作前ですからガリアにいる現在の虚無はジョゼフですよね？でも、ジョゼフさんがこの時期にサハラに来るはずがありません。

「違うな」

「ならば、どうやってっ！」

「魔法で上空に巨大な氷を物質化し、大質量を持って、カウンターもろとも叩き潰しにきた。」

「出鱈目の事をしますね。確かに、上から下に落とすだけならカウンターは効きませんね。魔法で操作された訳でもありませんしね。」

「妨害は？」

「蛮人は有り得無いことにマルチキャストによる魔法の弾幕で防いだ」

「それは本当に蛮人か？」

「この世界での人の領域を軽く超えてますね。同類でしょうか？とりあえず、聞いてみましょっ。」

「ビターシャルさん・・・彼等の目的はなんですか？」

「はい。蛮人の目的は・・・」

「どうしました？」

「シャイターンの門の観光と・・・」

「ふざけるなー！」

「私に云うな！　だいたい、既にシャイターンの門は姫様が破壊してくれているのだ。特に問題は無いだろ？　問題は・・・・・」

シャイターンの門は、私が転生して、7歳くらいの時に完全に破壊しましたから、観光なんて出来ないんですね。

今の私達は、シャイターンの門を完全破壊出来たかどうかを数十年単位での確認作業中で、砂漠から動く事もできませんし、観光目的なら諦めてもらうのがいいかもしませんね。

「問題はあるのですか？」

「はい。シャイターンの門への観光は次いで、本来の目的は我々エルフを奴隸にするつもりのようです」

「…………なつー？」

『マスター』

私達なら大丈夫です。さすがに奴隸にされるのは許容範囲を超えています。

私を心配してくれているこの子は、私が神様から頂いた転生特典の一つで、私のパートナーの魔導書です。他の特典はハイエルフと神のハーフとして生まれた事。魔力や容姿、精神耐性などやナデシコからマシンチャイルド、じき無しのボソンジャンプ可能など・・・・・  
・ 趣味に注ぎ込みました。

「実際に、後方から現れた空中戦艦に石化された同胞が積み込まれ

ていた「

「ふざけておるな」

「そこまで、蛮人に舐められるは・・・・・・」

「徹底抗戦だ」

「つむ。虚無ならば速やかに支配せねばならぬ。しかし、一人だけで防衛部隊がやられたなら、それ相応の準備がいるな」

どちらにしろ、転生者が相手なら勝てないうえに被害は大きいでしょうね。仕方ありません。私達で闘いましょう。

『はい。マスターのお望みのままに・・・・・・』

「いえ、必要ありません」

「姫様?」

「私です」

「――無茶です!姫様の身に何かあればどうするのですかー?」「

皆、一斉にこひらを止めようとしてくれています。ちょっと嬉しいです。

「いえ、おそらくですが・・・・・・相手は私と同じような存在だと思います」

「それは・・・・・」

「例え、人数をいくら集めても無駄に被害が増えるだけです。だから、私が行つて戦つてきます」

「しかし!」

「私だけでも、皆さんは敵いませんよね?」

「「「「うつ・・・・・」「」「」」

実際、模擬戦をすると、ヒルフの精銳部隊全てを相手にしても、圧勝できますから。

「後、これは姫としての命令ですが、私が負けたら大人しく投降か逃げてくだ・・・・・逃げるのは無理そうですね」

「ええ。高性能な航空艦隊を持っているようですね」

映像を記録するマジックアイテムで取られた映像には、日本の防衛にも使われていた船です。

「・・・・・イージス艦が相手ですからね・・・・・」

「イージス艦ですか?」

「それが敵艦の名前です。性能はガリアが採用している最新鋭艦の数十倍です」

「・・・・・我等の現在戦力では勝てないな」

「だから、投降してください。私は、倒せるなら倒しますが、倒せなかつた事を考えて出来る限りの譲歩を引き出しておきます。」

「わかりました。我々は民達をシェルターに避難させておきます」「お願いします」

これで被害は多少押さえられますね。後は交渉しだいです。

## 十一話（後書き）

転生者一人目はエルフの姫様です。

アテナがアーディール前から、歩いて行軍を開始した。

「あの・・・・・なんで歩くんですか？」

「ああ。あのアーディールに神か神殺しに類しする存在がいる」

「え？ 本当ですか？」

「菲尔は理解していないみたいだ。まあ、この感覚は神や神殺し特有の物だからな。」

「妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを越え行く者。

妾は謡おう、三位一体を為す女神の歌を。天と地と闇をつなぐ、輪廻の智慧を。

妾は謡おひ、貶られた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを。

妾は謡おひ、引き裂かれた女神の詩を。至高の父に凌辱された慈母の屈辱を。

「我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されど、かつては命育む地の大母なり！ かつては闇を束ねし冥府の主なり！ かつては天の叡智を知る女王なり！ ここに誓つ、アテナは再び古きアテナとならん！」

「本気だな」

「ですね」

16歳くらいに成長したアテナが一歩踏み出すと、砂漠が見る見る緑豊かな大地に成長し、萎びて死んでいく。もののけ姫のダイダラボッヂみただいだな。

「あつ、エルフの人達です」

フィルの云う通り、エルフの防衛部隊が出て来た。そして、攻撃を開始した。

「な、なぜたつ！？」

「精靈魔法が発動しない！」

「我が前に立つな」

アテナが手を一降りするだけで、エルフは闇に呑まれ死に絶えた。

「「來た」」

その言葉と同時に、二人の少女が転移して來た。その二人の内一人は銀色っぽい水色の髪をツインテールにした金の瞳を持つドレスのようなワンピースを來た少女。それに寄り添う、長い黒めの紫髪をストレートにした緑の瞳をしたゴシックロリータの格好をした少女。

「馬鹿な・・・・ホシノ・ルリにエセルドレーダだとー」

ルリの方は耳がエルフ耳だけど、やり過ぎだろ！リベル・レギス召喚可能なうえに、ボソンジャンプ可能とかどんだけだよ！？人の事は云えないが・・・・まづい、イージス艦がハッキングを受けれるかも知れ無い。

「貴女が・・・・神か神殺しか？」

「エセルドレーダが神の影を召喚出来ます」

「ならば、闘うか？」

エセルドレーダが前に出て、ルリを守る位置取りに移動した。

「出来たら引いていただけませんか？貴女方が云う聖地は完全に破壊しましたので、意味は無いと思いますよ」

「それは出来ぬな」

「ならば、事前交渉をしませんか？転生者同士ですから、まつりわぬ神・・・・女神アテナ」

「む・・・・」の世界で妾を知っている者がいるとわな・・・・

カンピオーネも読んでたのかな？

「どうしますか？」

「交渉なら妾では無いな。兄様・・・・」

「ああ。少し待つてくれ」

「諒解した」

二人が下がり、俺がルリの前に立つ。ルリは無表情で、エセルドレーダは汚い物でも観るような眼で見詰めている。

「初めまして、アルカイド・シンフォニア・ド・アルビオンだ」

「エルフの姫ルリ・ホシノです。ちなみに、これは勝手に決められました」

「そう。元は女性？」

「もちろん、そうです。」

容姿もいいし、これなら問題は無いな。

「さて、戦前交渉とこいつか」

「はい。こちらの要求は即時撤退と双方不干渉、捕まえたエルフ達の引き渡しです。貴方達が行っているのは侵略戦争・・・・犯罪です」

全くもって、その通りだ。ただし、それは元の世界。それも日本にだけ通用するんだけどな。

「犯罪か・・・・エルフをどうこうすることにロマリア、ガリア、トリステイン、ゲルマニア、アルビオンは文句を言わない。口

バ・アル・カリイエも文句は言わないぞ?」

「それは侵略者の意見です。我々は・・・・・いえ、意味が無いですね」

「ああ。後、その要求は却下だ」

エセルドレーダが殺氣を放つて来る。それに反応してアテナも戦闘体勢を取っている。

「こちらの要求は、無条件降伏し、全てのエルフを引き渡す事だ。当然、お前も入っている」

「貴様つ「エセルドレーダ」マスター・・・・・・

即座にルリが止めに入ったか。

「こちらもそのような、要求は受け入れられません」

「では、闘つて決めるか?」

「はい。ただし、賭けをしましょ?」

「ふうん、賭けの内容次第だな?」

内容次第で受けている。欲しいのは色々出来たしな。まずは、この無表情な一人をぐちゃぐちゃにして手に入れたい。

それにも、魔王の考えに染まって来てるな。

「まず、私達が勝った場合は先に云つた即時撤退を除く条件を呑んでもらいます」

「当然だな」

「私達が負けた場合は、エルフの技術を引き渡しますからエルフを奴隸にするのは勘弁していただけませんか？」

「却下だ。それでは、こちらの条件が悪すぎるだろ」

もちろん、理解しているだらうな。

「はい。ですから、そちらの要求をお願いします」

「エルフを奴隸から外すに、値する要求か・・・・・・」

さて、どうする?」の一人を虐めるには・・・・・・これだな。

「まず、一つ目はルリが俺の奴隸になる事。これはエルフ達の変わりをしてもらわねばならないんだから、当然だろ?」

「マスター、駄目ですっ!」

「いいのエセルドレーダ。負けなければいいだけだから。エセルドレーダなら勝てるでしょ?」

「はい・・・・・必ず」

さすが、エセルドレーダだ。忠犬ぶりが凄いな。

「さて、一つ目だが…………その前に、勝つた場合は現在捕まっているエルフ全ては帰さないからな。既に本国に送つてある

「…………わかりました」

王の命令なら仕方ないと思つたみたいだ。少し、涙目になつてゐるし、人体実験とか拷問を想像したんだろうな。箱入り娘みたいだし、色々できそうだ。

「改めて二つ目だが、ヒセルドレーダ…………ナコト[写本のマスター権限を頂こつか」

「「なつー?」」

「ふざけないでくださいー!」

「誰が貴様などを…………マスターとするか…………」

「ふふ、ふはははー凄くいい表情だ。

「なんだ、お前達にとつて、エルフの価値がその程度なのか?」

「それは…………」

「今まで世話になつたエルフに、自分の契約した魔導書が大事だから、貴方達を見捨てますっていうの?」

あ、俺は見捨てるな。アテナ達の方が大事だからな。

「マスター…………」

「くつ、わかりました。貴方達が勝てばエセルドレーダ……ナコト写本のマスター権限を貴方に譲ります」

「ま、マスター…………」

「『』めんね。エセルドレーダ」

「いえ・・・・・・勝てばよろしくのです」

掛かつたな。エセルドレーダの中に、自分よりエルフ達を優先するという不安も出来たし、いいだろ？

「さて、闘いを初めようか」

「その前に場所を移動しましょ？。『』では全力が出せません」

「いいだろ？。何処にするんだ？」

「世界を作り変えます。やるよエセルドレーダ」

「イエス、マイマスター」

改变してしまうのか。

「「其れはまるで御伽噺の様に  
眠りをゆるりと蝕む淡き夢  
夜明けと共に消ゆる夢き夢  
されど、その玩具の様な宝の輝きを我等は信仰し、聖約を護る  
我は闇、重き枷となりて路を奪つ、死の漆黒

我は光、眸を灼く「己」を灼く世界を灼く熾烈と憎悪、憎しみは甘く

重く 我を蝕む

其れは悪

其れは享受

埋葬の華に誓つて、我は世界を紡ぐ者なり」

詠唱が終わると同時に、世界は変革した。場所は一一つある円の一つのようだな。

「では、行きましょう」

「フィルは残つていってくれ」

「諒解です」

フィルだと、死んじやうからな。これからは完全な人外の世界だ。

「では、行きます……・ジャンプ」

その言葉と同時に、月へと転移した。

着いた月で、互いに二人ずつの対峙。条件を確認し、制約のマジックアイテムを使い、絶対に厳守させられるようになる。

「行くよ、エセルドレーダ」

「イエス、マスター」

「リベル・レギス！」

500Mもの巨大な存在を召喚し融合した。

「まともな力じや装甲は負けない。最初から全力で行くぞ」

「諒解した。では、行きましょうか」

ルリ達は天狼星の弓を装備し、アテナは黒耀石の弓、俺は漆黒の神剣を構える。一人とも機能を使用して準備を行う。

「行きます」

「こい」

天狼星の弓から、魔力の巨大な矢が次々と放たれる。それをアテナが小さな矢でその全てを粉碎していく。

『『化け物・・・・』』

「純粹な神たる妾を舐めるな」

いや、普通は有り得ないからな。それに、事前の揺さぶりが効いたのか、リベル・レギスは力が不安定だな。

「断ち切れ！――！」

アテナに弾膜を任せて、接近して攻撃を仕掛ける。

『マスターまざいですっ！』

『くつ、ジャ「遅い」しくじりました』

漆黒を纏つた神剣で、天狼星の弓を断ち切り、切り替えし様にリベル・レギスの腕を切断する。神剣は概念そのものを殺すから、ありとあらゆる装甲が無意味な上、漆黒を纏つた剣は概念を殺す力で距離すら殺す。つまり、一時的にリベル・レギスの大きさに剣を変更したように断ち切れる。

『反則過ぎます……』

『ハイパーボリア・ゼロドライブ』

魔力によって絶対零度の炎を右手に纏わせた手刀をしてくる。これは、単なる絶対零度ではなく負の無限熱量を持つている。

「ちつ」

距離を壊して、下がる。そこにアテナが大量の矢を放つて来る。もう一人がリベル・レギスの脚などの間接を石化させていく。アテナもまじチートだな。

『負けませんっ！』

ン・カイの闇で作り出した重力弾で、アテナの矢を迎撃していく。なおかつ、黄金の剣を取り出して攻撃して来る。無論、月はガンガンと大地が破壊されていつている。

「重力弾がうざい、なつ！」

『潰れて下さい！』『潰れや』

黄金の剣をエクスカリバーで受け止める。大地にクレーターも出来るがなんとか耐えられる。

『ジャンプ』

「くつ、くそ」

いきなり背後に現れたり、黄金の剣を振りながら横に現れたのを剣を縦にして防ぐ。

防いでいる剣を主軸にして、身体を回転させ黄金の剣を飛び超えてリベル・レギスの腕を叩き切る。

『『ぐつ』』

「剣術は素人だな」

『う、うるしゃじこいつー』

「シャナになつていいぞ？」

『と魔法は的確なんだが・・・・・・』には神がいるからな。

『演算能力は素晴らしいですが、それだけです』『闇はいつやって使つのです』

アテナの闇がン・カイの闇を飲み込んで喰らっていく。

「これで終わりだな」

リベル・レギスの上空に転移して、神剣を腰に構える。

「真名解放、約束された勝利の剣工クスカリバー！？！」

漆黒の闇が剣から溢れ出して刃を形成し、リベル・レギスを一刀両断した。勿論、コクピットの場所は理解しているので、二人は無事のはずだ・・・・・多分。

「兄様、何か落ちてきたぞ」

「え？ これは本のページ？」

リベル・レギスが解けて本のページになり、空から降つて来ている。

「これは、まよい・・・・・ 急いで集めろっ！？」

「「諒解した」」

それから、ナコト[即]本のページを全てを回収して、全壊しかけの月を後にした。俺も転移は普通に出来るからな。



勝利した俺は、ルリとエセルドレーダを引きずつて、ルリの部屋に俺は向かつた。後処理はアテナとフィルに任せたんだ。文字通りの神脳チートのアテナと半チートのフィルだから問題は無い。どうか、原作より相当発展しているし、ティガーとかの戦車やエステバリストっぽい何かがあつたと連絡が来た。エステバリストは未完成らしいけどな。

部屋に着いた俺は、ルリから契約により、エセルドレーダを奪い取る。

拘束したルリの目の前で、泣き叫びながら呪詛を吐くエセルドレーダを徹底的に犯しまくつてから、血を呑ませて契約を行う。契約によりルリの権限は無くなってるし、簡単だ。まあ、エセルドレーダは俺を殺す氣で精神攻撃をして來たので、本来なら死ぬんだよな。頑張つて自力だけで耐えたんだが、普通の状態でない、ナコト写本の精靈たるエセルドレーダ本人に拒否されている状態なので、ぶつちやけ無理だ。契約できそうになつたら最初つからという無限ループ・・・・やつてらんないよな？

「誰が、貴方なん、かとつ、契約しますかつ、私の、マスターは、一人、だけ・・・・・・」

頑張つて抗うエセルドレーダには悪いけど、容赦する気は無いんだよね。

「なら、ルリを殺すぞ？」

二〇一

お、  
揺らいだな。

「だ、駄目っ！」

まあ、脅しても結局無意味だ。本人が心の底から嫌がつてゐるし、口でどう云おうが意思は変わらない。というか、既に魔導書の本能に拒否されている状態だからな。なので、こちらも奥義・・・・・チートを使う。

エセルドレーダを犯しながら、女神フレイヤの運命を操り、神の寿命を伸ばしていた運命を操る力を使い、ナコト写本と契約出来ない未来を否定し、改変し続ける。これにより、ナコト写本との契約が完成した。

「ま、マスター……………すい、ません……………」

「ぐすり、Hセルドレーダ…………」「めんなさ」

次に、泣いているルリをエセルドレーダに押さえさせて、ルリも犯した。

それから一日間、一人を犯して立場を解らせ、最後に奴隸の証である首輪をつけ、沢山のエルフを集めた場所に連れていった。

「ひ、姫様……」「

「おこたわしや……」「

「おのれ、蛮族め……」「

「不甲斐無い我等をお許しください……」「

「精靈様、どうか我等をお救いください……」「

などなど、云われているが、エルフ達は共通して、じつに殺意や憎悪を向けて来る。それもそのはずで、俺に連れられたルリとエセルドレーダは首輪が嵌められ、服はボロボロに破かれ、身体に着いた粘液からも、何をされたのか一目瞭然だ。エセルドレーダは契約により存在が書き変わり、俺を最優先するようになつたので、背後に控えている。ルリは身体の一部をなんとか隠しているが、瞳は虚ろで光がほとんど書き無い。

「ネフテスはこれより我が領地となる。」「

「ふざけるなつ！」「

「誰が蛮族な……」「

叫んでいたエルフの上半身が、エセルドレーダの放つたン・カイの闇により、吹き飛んだ。

「マスターへの愚弄は赦さない」

「そ、そんなエセルドレーダ様……」「

「何故ですか！貴女様はルリ様の契約精靈では無いですか！」

「それは死ぬ前の私。今私のマスターはアルカイド様。だから、全てはマスターのために・・・・・」

マスター・テリオンに付き従つようにて、忠犬ぶりを發揮するエセルドレーダの頭を撫でてやる。

「へへへへへ

尻尾をバタバタ振つているエセルドレーダを幻視出来るほど嬉しそうだ。

「理解したか？貴様等エルフは俺に従つしか無いのだ」

「ふざけんなっ！」

「やうだつ！」

「姫様を救い出すんだ！！」

若いエルフ達が・・・・・いや、みんな姿は若いんだけど・・・・・・戦う準備をしだした。

「や、止めて下さー！」

「ひ、姫様」

「良いのです。私が奴隸になる変わりに、皆さんが奴隸にされ殺さ

れる事が無いよう契約しました

「姫様・・・・・・」

泣いてる奴もいるな。それからも、電子の妖精・・・・・・」  
じや、雷神の妖精か。とりあえず、ルリの説得は続く。

「だから、皆さんは私達の事は気にせずに生活してください。これは守れなかつた私の責任なのですから・・・・・・ぐすつ」

最後に泣いたらだいなしだらう。馬鹿だな・・・・・・ほら、來た。

「ひ、姫様だけに責任を取らすな!」

「そうだ、我等エルフが蛮族に屈するなど有り得ぬ!」

その場に集まつた半分ほどのエルフが、ルリを救い出そうと精霊魔法を使おうとした。

「Hセルドレーダ、やれ

「イエス、マイマスター」

「ただし、女は生かせ」

「・・・・・(一)ぐ

Hセルドレーダが小型化した天狼星の弓を召喚し、黄金色の矢を放つ。その一本の矢は途中で多数にバラけ、目標に向かつた。

「ま、マスター・・・・・」

前の感情があるのか、矢はルリの声により停止し、停滞した。やはり、ルリの支配から完全には抜け切れていないようだ。ならば、ちよつといい。

「やれ。一度目は無い。Hセルドーラの忠誠を見せてみろ」

必死に矢を落とそうと精靈魔法で攻撃するエルフ達に、終わりを知らせる命を出す。

エセルドレーダの一瞬だけ悩んだが、俺の命令とルリの悲願を賭けた天秤は、俺の命令を優先し、エルフの攻撃を一切受け付けなかつた別れた矢はエルフ達に襲い掛かつた。

ルリの絶叫が響く中、次々とエルフ男性の頭を黄金の魔矢が吹き飛ばし、次の獲物を狩つていく。女性のエルフは両手や両足を吹き飛ばされたり、折られたりしているが、なんとか生きている。

「よし、女のエルフは連れていけ」

「『アーヴィング』」

到着していた兵士が、泣き叫んでいるエルフの女性に、治療しながら猿轡を噛まし拘束して、イージス艦に連れていく。

「さて、貴様等が逆らわなければ今まで以上の生活を保証してやる。これは契約のためだから安心しろ。ただし、逆らつたり、犯罪を犯せば死刑か奴隸行きだ。いいな？」

ルリが虚ろな目をして泣いているが、今は放置。いや、うるさいので、足を口に入れて泣き声を止めさせる。

「…………」「へへ」「」

「よひしい。これより君達は我が民だ。住所登録などの個人情報も登録するから議会場に行き、住民票を貰つて来るようだ。後、俺達とガリアを蛮族だと思わないように・・・・・以上」

それから、兵に指示を出して帰宅して、エセルドレーダには「褒美をあげて、ルリはちょ・・・・・げふん、躰を行づ。丁度、いい感じに、エルフの反乱分子と一緒に、ルリの精神が壊れたから都合がいいからだ。

兄様があの一人で楽しんでいる間に、法改正を行い、評議会の利権や権限も全て掌握し解体した。全ては兄様や私達に従うようにして、ネフテス領とした。ファイルと協力してここまでで一日。

基本的にネフテス領は、評議会から引き抜いたビターシャルとテュリュークに基本的に任せた。領主は名前だけルリにしてある。あの小娘はエルフにとって、生き神みたいな存在だから。

さて、妾はビターシャルを連れてアディール近郊に来ている。

「さて、報告にあつた件だが」

「はい。我々エルフは精霊魔法により、サハラでの生活をこなしていました。姫様の発明品のお陰で多少はましですが、このたびエルフの人口が急激に減ったため・・・・・・」

今、結構な数のエルフが処理されましたからね。

「よろしい。兄様からの命令もあります。妾の力で解決してあげます。欲しいのは自然ですね？」

「御意」

ビターシャルは膝を付き、臣下の礼を取る。この者とテュリュークは妾が精霊の上位存在である事に、なんとなくでも気が付いているようです。

「巻き込まれたくないなら、空中にいなさい。」

「はつ！」

すぐにフライトで空を飛んだビターシャルを無視して、大地に呪力を流す。

「どうやら、龍脈が死んでいますね」

呪力を通し、歴史を診ると、聖地にあつたシャイターンの門が龍脈の力を喰らい砂漠化の原因である、龍脈を殺したようです。そこから出て来たブリミルが悪魔と云われるのは間違いありませんね。

「既にシャイターンの門は存在しない。なら、問題は無い……。  
・再生させましょ！」

指先を噛み、血を大地に流す。それと同時に死々た龍脈に呪力を注ぎ込みながら、権能を使い新たな龍脈に生まれ変わらせる。

そして、大地には祝福を授ける。次に、龍脈の上に神聖な湖を作り出す。

「静水久」

「喚ばれて飛び出てじゃじゃじゃんなの」

「…………」

「…………」

「スルーはつらいなの」

湖の水を通して、転移して来た水の精靈静水久。

「だから、スルーはつらいなの」

「やらなければいいのに。まあ、いい・・・・・・ここを貴女にあげるから、変わりに木々や植物の種とかを取ってきて」

「やれと電波を受信しただけ・・・・・・なの。まあ、諒解なの〜」

それから数分もしないうちに、湖に切られた木々や種・・・・・・世界樹の枝まで持つて来た静水久。

「世界樹を傷付けるなら事前連絡をお願い」

「アフターケアはしておいたなの」

「なら、いい」

「あれが水の精靈様だと・・・・・・」

空で嘆いているのは無視して作業に入る。

「静水久、手伝ってくれ」

「諒解なの」

まずは湖の真ん中に世界樹の枝をさして、二人（柱）で祝福を授け、成長させる。数百メートルの巨大な木ユグドラシルを作り出した。それにもない、湖も広げる。

「マナの放出に龍脈の気が流れ込んで、どんどん力が上がっていくな〜」

「土地神みたいな者だから・・・・・・次はアディールの周りを緑豊かにする」

「任せせるなの！」

私達は作業を開始した。

数時間後、ネフテス領アディールはその姿を一変させていた。

「やり過ぎた」

「気にしたら負けなの」

「素晴らしいお力です」

アディール近郊はジャングルになっていた。それだけでなく、アディールの中も緑豊かになり、建物には木々が絡み付き、兄様が書いていた本に出て来るエルフの住まいへと変貌していた。

「エルフの人や精霊も喜んでるし、別にいいと思つの」

実際に、ユグドラシルから降り注ぐマナの光の球により、力を得ていく精霊は飛び回り、幻想的な世界を作り出している。

「なら、構いませんね」

「じゃあ、進軍を開始する・・・・・・なのーー！」

いきなり邪悪な笑みを浮かべた静水久は、川を作り出し、砂漠に水を供給していく。

「ネフテス・・・・・いえ、兄様のために砂漠を創り変えます」  
それから、私達はネフテス中を緑溢れる豊饒の大地としました。街の近くには軍事施設も作りながらなので、時間もかかりますが、どうせ兄様は一人でお楽しみ中なので、特に問題はありません。ルリを早く取り込めれば、統治が楽になりますから。

## 十四話（後書き）

これでエルフ編終了かな？

静水久は大精霊クラスに強化されましたし、ネフテスは落ちた。ブ  
リミル教には教えませんけどね。

最後に幼女魔王の方もよろしくです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7171w/>

---

魔王と神と天空の城

2011年11月4日16時06分発行